



復興支援専門家のインタビュー記録

～災害復興支援とファシリテーションを考え深める～

特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会 災害復興支援室

はじめに

日本ファシリテーション協会（FAJ）災害復興支援室では、2011年3月の発災以降、被災者や被災地、復興支援団体などの声や要請をいただきながら活動を進めてきました。その活動の中で「被災地支援を実践している専門家（FAJ 外部）で、住民主体の復興支援を対話や参加を重視しながら促進（ファシリテーション）している方をぜひご紹介し、復興支援とファシリテーションをさらに考えてみたい」という提案が支援室で出されました。被災地では多様な方々の多様なファシリテーションがあり、それを多くの方に知っていただき、共に考え深めてみたいと思ったからです。そこで今回は被災地に継続的に通って支援されている4組の方にご協力いただきました。

掲載にあたっては「インタビュー記録」という形をとりました。あまりまとめすぎずに、インタビューさせていただいた内容を読者の皆様にご覧いただき、この中から様々な側面のファシリテーションを感じていただきたいと考えたからです。

最後に、被災地支援でご多用の中、貴重な時間を頂戴した4組の専門家みなさんに感謝を申し上げます。ありがとうございました。

特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会
災害復興支援室 専門家インタビュー担当

< 目 次 >

金 香百合 さん

HEAL ホリスティック教育実践研究所所長

..... 3

櫻井 常矢 さん

高崎経済大学地域政策学部教授

..... 13

篠原 辰二 さん

特定非営利活動法人 Facilitator Fellows 理事・事務局長

..... 26

野崎 隆一 さん

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所理事・事務局長

浅見 雅之 さん

合同会社人・まち・住まい研究所代表社員

..... 39

金香百合さん

HEALホリスティック教育実践研究所所長

在日韓国朝鮮人三世として大阪に生まれ育ち、大学卒業後に財団法人大阪YWCAに就職。そこでの運動を通じて、ジェンダー、子ども、心のケア、生と死などの多様な問題に取り組み、参加体験型学習による学びのファシリテーターとして全国各地で活躍。東日本大震災後は、現地に出向き被災者のメンタルケアを実践。福島・宮城でサロンやワークショップを実施している。阪神淡路大震災の際も心のケアグループを立ち上げ活動した経験もある。



普段の仕事と被災地での活動

<FAJ> 今日は、東日本大震災後の活動とファシリテーションについてお話をお聞かせください。まず、金さんの普段の仕事や活動を教えてください。

<金> 私の主な仕事の一つは、人権や教育、男女共同参画に関わるテーマで講演やワークショップを全国で行うことです。生きづらさを抱えている人々が多い中で、人と人との関係を修復するヒントについて気づいてもらう場を作ったり、話をしたりしています。当事者と当事者に関わる人たちがどう関わっていけばいいのかなどを考えていただきながら、その人が自分らしく元気になっていただく支援・ファシリテーションをしています。

<FAJ> 東日本大震災後の被災地での活動内容について教えてください。

<金> 私の東日本大震災後の支援活動は、「日本YWCA復興支援室のメンバーとして、福島YWCAと仙台YWCAがある福島県と宮城県でお手伝いをする」ということで大阪から派遣されたのがスタートです。「心のケアの分野でできることをする」というのが、私に与えられていた役割です。そして、その

活動の間にさまざまな支援団体や関係団体の出会いにより立ち上がった、「支援者のための支援センター・TOMONY（トモニー）」に関わらせていただき、スーパーバイザーという役割をいただき、力を入れて関わっています。

<FAJ> 福島YWCAと宮城YWCAで、どんな支援をなさっているのか教えてください。

<金> それぞれ1ヶ月に1回訪問し、「心のケア講座」「心のケアサロン」といったものを開催しています。これは被災地で起こる「体と心の変化や問題」について理解していただき、その変化や問題から回復していただくための講義やワークショップです。福島のYWCAでは、単発で毎回どなたでもどこからでも来て良いという形での「心のケアサロン」を毎月開催しています。仙台のYWCAでは、「仙台YWCAこころの杜」を立ち上げて、年間カリキュラムを立てて進めてきました。

これらの取り組みは、私が阪神淡路大震災の支援活動で「心のケアネットワーク」を立ち上げて運営してきたという経験を生かして、東日本大震災でも被災者の心のケアを行うというのが日本YWCAか

らの招聘の目的でした。ただ、こちらに来て関わ
りながら思ったことは、阪神大震災のときの経験で生
かせるものもあるけれど、神戸の時の経験だけでは
やっていけないことがいっぱいある、ということだ
りました。あまりにも被害が大きすぎ、広すぎる。そし
て地震と津波という違い、あるいはさらに福島でお
こった原発事故の問題、というようなものが次々と
想定を超えて広がっていく。その中で、いつも学び
直しながら、考えながら、あるいはいろいろな被災
者の当事者の方々の話を聞きながら、支援とは何だ
ろうか、よりよい支援とは何だろうかということ
をずっと考えながら、そして今現在も考えながらや
っている、そんな状況です。

「こころのケア講座」

第1回	対人援助とは	2012年6月16日(土)
第2回	人間力を深める	2012年7月21日(土)
第3回	社会力を高める	2012年8月25日(土)
第4回	対話力を磨く	2012年9月15日(土)
第5回	聴く力を実践する	2012年10月20日(土)
	特別プログラム	
第6回	「若林区を訪ねて 歩く」	2012年11月17日(土)
第7回	喪失体験とは何か	2012年12月15日(土)
第8回	ホリスティック支 援	2013年1月19日(土)
第9回	震災から2年	2013年2月19日(土)
第10回	3年目を生きる	2013年3月16日(土)

サロン活動でのファシリテーターとしての工夫や 気配り ～食、道具、話し方、場づくり～

<FAJ> 支援活動をされている中でどんな工夫を
しているのかというお話を伺えますか？サロンを行

なううえでのファシリテーターとしての心配りとか、
どんなことを大切にしておられるのですか？

<金> 例えば、飲んだり食べたりすることをとても
大事にしています。

人間は当たり前飲んだり食べたりする生き物で
あり、それは人間の喜びにとっても深くつながるもの
なのです。全国の研修室や研修センターは飲食禁止
が多くて、これは非常に残念だし愚かなことだと思
っています。人が学ぶということは、無機質なコン
クリートに固められた空間の中だけであるものでは
ありません。ですから、飲食まで禁止してそれで学
ぶ効果を上げろと言っていることはすごく陳腐だと
思います。人はリラックスして安心できる環境の中
にいる時に最も学習が深まったり学びが飛躍的に進
んだりするものなのです。私はできる限り人が集う
場所あるいは講演会でもワークショップでも、勿論
飲食します。

<FAJ> 聞く時間、飲食する時間、また話して聞く
時間といった具合にメリハリをつけながら工夫する
ということですよね？

<金> そうですね。私は、食べることや飲むことへ
の理解や関心というものを、全てのファシリテータ
ーが持つといいなと思うんですよ。『人間は食べた
ものでできている』という名言もありますから。フ
ァシリテーターをしながら「自分は菓子パンばかり
食べて、お菓子食べながら残業している」という
生活を繰り返しているのはいかがなものかという
ところですね。

<FAJ> 他にはどんな工夫をなさっていますか？カ
ードも使われているようですが、道具類などで何か
特別な工夫はありますか？

<金> カードなど、何かちょっとした道具を使うと
いうのは、子どもたちと色々なことをしてきた経験

から生まれてきたものだと思います。

カードや道具を使うと、分かり易くて理解し易いという効果があります。子どもにとって分かり易いことは、結局大人にも理解しやすく分かり易いということなんですね。

あと、話し方が分かり易いとよく言われるのですが、それは多分、子どもたちに話をしていたときに鍛えられたのではないかと考えています。子どもたちが理解できるように伝えるためにはどう話したら分かり易いか、どういう順番で話せばよいか、ということをつも考える癖・習慣があります。

<FAJ> 金さんの話の仕方は分かり易いけれども、子どもっぽくないですね。

<金> ワークショップでよく、参加者が『こんな子どもじみたことをさせて』と怒って出て行かれたといった話を聞くことがありますけど、どんな進め方をしたら、「そんな子どもっぽい幼稚なことをさせられた」と怒ってしまうのかなと思いますね。

逆に子どもたちに話をしているときにも、極端な子ども言葉を使うわけではなく、子どもを一人の人格を持つ人間として丁寧に対等に伝えようとしているところがあります。

<FAJ> 子どもだからというよりは、子どもも一人の人間ということですね。

<金> 伝えたいという気持ちをマインドとして持っているので、どういう工夫をしたらこの人に伝わるのかということを中心に考えています。相手が例えば障害のある方であったり、高齢者であったり、外国の方であったり、色々な方に対しても基本的には同じことを思いながら伝えていくようにしています。また、私はよく例え話をしますが、その例え話を相手の体験に合ったものにするとか、年齢を考慮したり、また相手が学校の先生であったら学校という空

間でこういうことがよく起こっているでしょうというような、相手に共感や理解をしてもらえる例え話が必要だと思います。

<FAJ> 言った言葉を、ああそうだなと思ってもらうための例え話ですね。他にどんな工夫や配慮をなさっていますか？

<金> 労を惜しまず、場を作り直します。どうすれば、今日来る人たちにとって一番安心できたり居心地がよかったりするかなと考えて、机を動かすとか全部出すとか椅子を入れ直すとかいうことを面倒くさがらずにやります。

私は、サロンの時にはわりと講義形式の机のレイアウトで始めます。昔、ワークショップが導入された頃にはネコも杓子もイスを丸く並べたようでしたけれど、中にはそれで抵抗感や不安感をかきたてられてしまう人たちも多かったのです。そのため、あえて私はスクール形式という、もっとも皆が慣れたスタイルで始めます。その代わりに、できるだけ3人がけの机から椅子はひとつ抜いてもらって2人掛けにしてもらい、すぐそばにいる人とおしゃべりしてもらうようにします。そこから始めて、4人や6人にしていくという風に広げていく方法をとります。

この、いきなりグループにしないというやりかたは、私がやってきた方法の特徴的なところですよ。



の集団学習でやっていたように、いきなりグループにすると、しゃべる人はしゃべる、黙っている人はずっと黙っている。そこには均衡で良い関係が生じ難くなってしまいます。一対一から積み上げるといふことをすると、均衡で良い関係が生まれ易くなっていくと感じています。

<FAJ> そうするとかならず机の移動、模様替えという作業が出てきますね。

<金> そうなんです。今は「意識をしてレイアウトを変える人」が多くなりましたね。この方法は人間心理に基づいたやり方だと思います。

阪神淡路大震災からの教訓

<FAJ> そこで伺いたいのですが、東日本大震災の支援活動で金さんの役割はどんなことだと考えていますか。

<金> 阪神淡路大震災の時は、住んでいる大阪のすぐ隣の神戸の支援ということで、毎日事務所で寝泊まりしながら関わることが出来ました。けれども、今回の東日本大震災の支援では、遠く離れた大阪から、被災地には月1回、3日か4日という非常に限られた日数であるということで、私が果たせる役割も、ぐっと違うものになっています。そこで私が役割として担えることの一つは、災害後に人々の心や体や社会や地域におこることを皆さんに伝えることだと考えています。

<FAJ> 起こるであろうこととも含まれますね。

<金> そうですね。そして起こっていることやこれから起こるだろうことへの対処の仕方を身につけることが重要だと考えています。自分達に起こっていること、例えば、ものすごく不安になったり、気持ちが落ち込んだり、あるいは無気力になったりする

ことは、当たり前のことなんだ、何も気が変になった訳でも何でもなく、非常につらい経験をした時の体や心に起こってくる正常な反応なんだ、といったことをお伝えする。そのことだけでも意味があると考えています。

<FAJ> 確かに被災地の支援者の方などに話を聞くと、自分で自分のことが分からないと言っておられる方がいますよね。

<金> そのような場合には、「やがて落ち着いてきますよ」と言うとか、「そういう状況があまり長く続くようだったら、ちゃんと相談のできる所に行ったり、お医者さんに行ったりすることが良いことですよ」などと言うことがあります。

求められている支援者の支援

～支援者自身を意識する・大切にす・気づく～

<FAJ> 金さんは「支援者の支援」の活動もされていますが、支援者の支援ということが福祉の分野で言われ始めたのは10年前くらいだったかと思いますが、「災害支援の時の支援者の支援」というものはまだあまり言われていませんでしたね。

<金> そうですね。この支援者の支援、ケアする人のケアということは、阪神淡路大震災の時に言われ始めました。その時以上にこちら東日本大震災の被災地では、支援者が自分自身にもケアが必要であるということや、自分でちょっと休息して、自分を優先することが大事だということを知ってほしいですね。東北の方々は、特に真面目で、誠実で、頑張りすぎる傾向がより一層強いようで、休むことに罪悪感を持っている傾向が強いですね。

<FAJ> 休んでいて良いのだろうか、という気持ちなんでしょうね。

<金> そして、また Gender（性別）という問題があります。全てのことに Gender という問題は重要な関わりを持ちますけれど、このケアする役割というのが、元々 Gender 意識の強いこの日本では、女性に非常に強く働くんですよ。

<FAJ> ケアする役割は女性だ、みたいな捉え方をしている人が多いということですか。

<金> そうです。ケアをする役割は女性だけで担える状況ではないわけです。それにもかかわらず、真面目で律義な女性の方々が、その家族の為に地域の為に、何もかも自分を犠牲にしてやり過ぎるという、これは危ない状況ですね。一人一人が追い込まれて Burn Out していく。ケアする役割を担いやすい女性には、「自分にもケアが必要である」ということや、「自分にもちょっと休息したり、そして自分を少し優先するということが必要」、ということを知らせていくのが必要だと思います。

<FAJ> 支援者やファシリテーターが、自分自身をしっかりと意識する、大切にしないといい支援活動や効果的なファシリテーションができませんね。

<金> 被災地においては、ある意味、全ての人が支援者といっても良いのです。家族の誰かを支援している、兄弟の誰かを支援している、友人・知人に心配な方があって、その方々に思いを寄せている、ということが一杯起っている。また専門的支援者として仕事として支援にあたっておられる教育関係者、福祉の関係者、医療の関係者。そういう支援をする立場の人々は本当に疲弊していきます。その支援者にも休息やケアが必要で、支援者にも支援が必要です。そのことを言って回ることで、そしてその為に具体的に様々な提案をしたり、方法を伝えていったり、場を作ったりすることが、私の限られた時間の中でできる大事なことと思っています。

<FAJ> 今回、福島と宮城で出会う支援者やファシリテーターにもケアが必要な人がいると感じますか？

<金> 感じますね。福島は原発問題があります。それは全く新たな、しかも終わりのない、今後ずっと持続する、目に見えない恐怖のような被害を受け続ける状況です。ここでは、支援のあり方、考え方に、新しい知恵や工夫がものすごく必要ということを思います。県外避難者が多くいる。2年も経つと、この県外避難者の方が帰ってくるのか、離れて流出していくのか、いろんな選択が迫られており、地域づくりの中でも、捨てて行った、捨てて出て行った人、というような言葉が交わされたりしています。地域住民の中で、お互いに皆被災者なんだけど、傷つけない、攻撃し合うようなことが、複雑な形で起こっている。そう思います。

<FAJ> 「自分はどのような考え方で行動するというのを近所の人に言えない」と福島の方から聞きました。皆違うのですよね、考え方が。原発や放射能への考え方となると非常にセンシティブです。そこでどう支援していくか、難しいですね。

<金> そうですね。根本的には人生は一人一人違うから違う選択肢で良いのですが、その考え方が根付いていないと感じることが多々あります。

<FAJ> 違っていいということと、皆と協力するというのと、何か取り違えてしまうようなことがあるかも知れない。だから「絆」という言葉も、人によっていろんな捉え方があるんですね。

<金> そうそうそう。声の大きな人が「こうするんだ」と言って、違う意見の人は排除されていくような、古い時代の「絆」はもう全然役に立たないし、必要ありません。新しいこの時代の「絆」の作り方は、個々人の自己決定というものを大切にしながら、

尚そのうえで「絆」でつながっていることなんで、そこがしっかり根付いていかないといけないんです。ファシリテーターはその部分の気づきを被災者や支援者に促せたらいいですね。

自分とファシリテーション

<FAJ> 活動でファシリテーターとして行動する時、金さん自身が大切にしていることを教えてください。

<金> 実は、私自身は、阪神淡路大震災の心のケアの活動が一段落した頃に、もう一度自分の体験を整理してみようと思って大学院に行ったんです。そこで、総合的、包括的に物事を見て捉えてアプローチするという、ホリスティック教育に出会い、自分が経験してきたことを少し整理させていただきました。

私自身の究極の願いは、全ての人が幸せに元気に生きていくことのできる社会を作っていくことなんです。自分の経験をホリスティックに整理し、全てのの人に幸せに生きてもらうために私に何ができるのか、ということを考えて時に行き着いたのは、「誰にでも、ファシリテーションの力があって、そしてエンパワーメントの力があって、人と社会を幸せにしていく力があるのだ」という考えでした。

私はファシリテーターを会議の場とか、あるいはワークショップの場だけではなくて、「生き方としてのファシリテーター」という考え方をしています。いつでもどこでもどんな場所に居ても、そこで人と社会を幸せにしていく役割を発揮できるようなファシリテーターになる。24時間ファシリテーターであるということをめざす。その為には原石を磨いていくということが、非常に重要です。ファシリテーターとして生涯磨いていかなければいけないものは、人間力と社会力と対話力、そしてその全てを繋いで

いくホリスティックな力です。

ファシリテーションの3つの力 ～人間力、社会力、対話力～

<FAJ> 人間力、社会力、対話力。後はホリスティックな力ですか。

<金> そうです。人間力と社会力と対話力を全部繋ぐホリスティックな視点のことです。まず、人間力ってというのは、人間を理解するということです。人間を理解し、愛し、そしてその人間が幸せに元気に生きていけるように、どういう風に関われば良いかということを考えていける力です。グループの場合は私が直接的な関わりをずっと持つことはできませんから、グループの集団的な力を用いて、グループが機能する仕組みを作っていけるように考えることです。それと人間が辛い時、苦しい時、あるいは災害などで沢山の喪失体験を経験している時、どんな状況に陥り易いのか、そういう時は特に何に気をつける必要があるか、何をしたら良くなって何をしない方が良いか、そういうことをちゃんと知っていて実行できる、という事が人間力ですね。

<FAJ> 人間力には他に、人間の体、心理、思考、行動パターン、生理学、発達、気持ちの問題など、色々入ってきますよね。次の、社会力ってというのはどういふことでしょうか？

<金> 今、社会が激変してきていますね。その激変する社会が私達にとっても大きな影響を与えています。例えば、40年前、1970年代と今とでは、日本人の生き方、暮らし方がかなり違ってきています。大家族だったものが核家族になり、単身世帯になる。また、高齢化が進み、結婚しない人が増え、晩婚化が進み、あるいは離婚率が増えてきている…。また昔は誰で

も正職員になれて、頑張って真面目に働いていけば給料が上がり、定年まで働いたらちゃんと退職金を貰って安定した老後を過ごせた。それが今は全部崩壊しています。私達は今グローバル経済に巻き込まれて、といった状況に社会が激変している訳です。

<FAJ> 社会が変わってきているということですね。

<金> こういう社会の中で、人々が繋がれなくなってきたり、人間関係が全て競争というものになっていたり、あるいは、そこでの勝ち組、負け組とか、そういう関係の作り方になっていることが否応なくあるんですね。こういった社会の変化は今もこれからも次々に起こっていくでしょうけれど、まず、社会がどういう方向に行こうとしているかをきちんと読み取っていくことが大事です。

そしてもう一つ重要なことは、社会は人間が作ってきたものですから、社会を変革していくことに関わっていくという力です。

<FAJ> 「社会をより良くしていこう」というアクションを出していく力ですね。

<金> そうです。ですから、簡単にできることとしては、政治や経済にきちんと関心をもつとか、選挙には行くとかいったことが、まずは大事になってきます。

社会のことに無関心でいると全然だめなわけです。この社会のありようを自分はどうみているのかというのを、例えばビジネス系のファシリテーターの方々はすごく問われるわけです。私はこの経済至上主義に巻き込まれている現在の社会のありようは、あまり良いとは思っていません。人間を幸せに元気にしないと考えています。「生き方としてのファシリテーター」としては、どう変えていけるのかということのを常に考えていくことが大事だと考えています。

<FAJ> お金と会社や組織という道具をどういう風



により良く使っていけるのかですね。

<金> 人間と社会をつないでいく最も大きなもののひとつが対話、コミュニケーションです。

人と人もつなぐし、社会と社会もつなぐし、あらゆるものをつないでいくための大きな一つが対話です。勿論、対話だけが全てとは思いません。でも対話はかなり大きなものと考えています。

ファシリテーションにおいて、私がすごく重要なことと思っていることに「水平の関係」があります。人間同士である、私とあなたとの水平の関係における対話と、「垂直な関係」である「神との対話」があります。対話は、話すこと聞くこと、その両方をバランスよくできることです。話すこともできるし、聞くこともできる。話したり聞いたりするやり取りの中で、学んだりもの考えたりあるいは癒されたりすることが対話になってきます。

ファシリテーションとホリスティック

<FAJ> いままでファシリテーションの3つの力として、人間力、社会力、対話力についてお話しを伺ってきましたが、それらを包む「ホリスティックな視点」について、前にも少し触れておられました。

さきほどは、「ホリスティックとは総合的という意味だ」というお話をいただきましたが、もう少し詳しく教えてください。

<金> ホリスティックという言葉は直訳するときには、総合的な、包括的な、あるいは全体的なとかいった言葉で翻訳されますが、宇宙とか・・・人間ではない、人間を超越するものを含んだ言葉です。社会はどこまでも人間が作ったものですが、そういうものを超越する存在を含んでホリスティックだと考えます。

<FAJ> 宇宙も含むことなんですね。

<金> そうです。宇宙も含むと言うと、すごく興味深くつながってくるのが、人間力です。人間ってどこからきてどこに向かっていくのか、何でできているのか。生物学で言えば、人間は宇宙の中にある分子でできている。だから人間は宇宙の一部であるということにもなります。

<FAJ> そのような考えを意識することは、あまりないかもしれませんね。ホリスティックという言葉は、日本ではどれくらい前から聞くようになったのですか？

<金> 25年～30年ほど前にホリスティック医学というものが最初に紹介され、考え方が導入されています。

ファシリテーションとエンパワーメント

<FAJ> さきほどの話に戻りますが、金さんは「生き方としてのファシリテーター」ということを、いつも考えながら日々ファシリテーション力を磨いているというお話をいただきました。「ファシリテーションとエンパワーメント」というのも、金さんの中では近い関係にあるのですか？

<金> そうですね。「エンパワーメントを可能ならしめる関わり方」がファシリテーションだと思います。

<FAJ> ファシリテーションのことを、「引き出す」とか「溢れる」とか言う方もいますし、「漂っている」と言う方もいます。「ファシリテーションはどこにでもあって、そこで機能している」という表現をする方もいます。そういった中で、この「3つの力とホリスティックな視点」というのは、ある意味スキルでもあり、マインドでもありますね。

<金> そうですね。マインドということ言えば、私はどちらかというと性善説で考えます。人間はとても良い形で誕生して、とてもうまく作られている。だからこそ、全ての人は幸せで元気に生きていけるようにできているはず。だから、それを可能ならしめるファシリテーションが必要になってくる。人はエンパワーメントできるように生まれてくるけど、実際には人と人の関わりが必要というのが人間の面白いところだなあと思っています。

<FAJ> 人との関わりでエンパワーメントが起き、人が元気になるといった具合ですね。

<金> 人との関わりなしには、エンパワーメントもできないと思います。ただし、唯一の例外として、自然との関わりをもつことによって、エンパワーメントが起きる場合がありますね。

被災地で求められるファシリテーター

～混沌とした被災地の回復に必要なことは～

<FAJ> 東日本大震災が起きて、今年が3年目ですよ。3年目が本当に大変だということを、金さんから伝えて頂いていますね。3年目を迎えて、被災地でこれからもファシリテーターは必要でしょうか。

<金> はい、とても必要だと思います。この「3年



目が回復のプロセスの正念場」と強く思っています。これからの課題は、メディアや全国の方々の関心が急激に薄れ、同時に助成金や寄付金や色々なものも終結になって、経済的にも人的にも外からのサポートがなくなっていくということです。

この3年目をどのように一步一步築き、歩み続けていくかといえば、少しでも元気な人、エネルギーが回復している人が、支援者やファシリテーターなどの助けを借りながら、元気そうな人々を繋いで、人と地域を少しずつ光の方向、回復の方向に歩みを進めていくということだと考えます。今から新たな支援が必要な時期なので、ここまでの2年間に支援に関われなかった人々も、あまり気負わずに一緒に喜怒哀楽を味わいながら寄り添い続けていく、そういうファシリテーターが必要だと思います。

その意味で、緊急時の支援者と、寄り添い続けて

いくという支援者やファシリテーターの違いはあると思いますね。

<FAJ> 寄り添いながら定期的に通うような、そういうファシリテーターも、まだまだ必要だということですね。

<金> 必要ですね。その通い方にも色々あると思うのです。例えば1年に1回でも良いんですよ。それを10年続けていくようなことが大事なのです。「毎年5月の連休になれば、いつも来てるよねえ」って、「かれこれ、もう5年になるよねえ」、「10年になるよねえ」みたいな、そういう関係を作っていくことがすごく大事になってくるのです。

<FAJ> 被災地域の人も、応援してもらっている安心感というものもあるでしょう。「あっ、忘れないでいてくれるんだな」とか。まさに、人間力と関わってくる部分ですね。

<金> そうですよ、本当に。

<FAJ> ファシリテーターは、「エンパワーメントを可能ならしめる関わり方」はどういう関わり方なのか、ということのを常に考え続けることが必要ということですね。まだまだ続く復興支援においては、とても重要で、かつ誰にでも意識可能なことでもあるなと思いました。これからも活動を応援しております。今回はありがとうございました。

●コラム●

金さんのエネルギーの源

<FAJ> 金さんはとてもパワフルに活動されていますが、そのエネルギーはどこからくるのですか？

<金> 言うのが少し恥ずかしいんですが、短い言葉で言うならば『生かされていることへの感謝』というエネルギーかなと思います。

以前は自分が在日韓国人、朝鮮人に生まれたことや、コンプレックスがたくさんあって、劣等感の中で自尊感情が低く生きてきた時代がありました。そこから解放されていた20代での経験は大きな意味がありました。後から気が付いたのですが、その時に出会った仲間や先輩達から、「私は私のままで、このままでOKなんだ」ということを言ってもらい、そして親からもそんなことを言ってもらっていたんです。

更にもっと深いところの存在は神です。人間は、生まれた時に神から「全ての人間はこれでOK」と言ってもらって誕生しているわけです。そして私がこうして生かされて幸せに元気になれたように、神が作った全ての人はそうな

れるはずだと思うことが『生かされていることへの感謝』につながるようになりました。

<FAJ> 神というのは、大きな存在としての神ですか？

<金> はい。実際に私は30歳の時に洗礼を受けているクリスチャンですけれど、教会に全然通っていないクリスチャンです。仏教も好きなので、私にとっての「神」は、イメージとしての「大いなる存在」みたいなものです。自分に出会い、人に出会う。この2つだけでも、かなり大きな回復とエンパワーメントのポイントになりますけれど、更に「神」に出会うこと。この「神」は、宇宙でも自然でも良い、大いなるものなのです。この「人間を超える、超越するものと出会う」ということは、ある意味一つの悟りなのかもしれません。

<FAJ> 「感謝や悟り」などが金さんのパワーの源なのですね。ありがとうございました。

櫻井 常矢 さん

高崎経済大学

地域政策学部・地域づくり学科 教授

地域づくり教育・NPOの教育力をテーマに研究。地域づくり支援の際は住民同士、住民行政の対話の場づくりを丁寧に行っている。福島県浪江町の被災者支援を行い、各地での対話・交流の場づくりやワークショップ、被災者の話し合いから実践への支援、政策への住民参加等を実践中。



ファシリテーションとの出会い

<FAJ> 櫻井さんがファシリテーションを意識するようになったのはいつごろからですか。

<櫻井> 難しい質問ですね。ファシリテーションという言葉を知ったのは、やっぱり大学生の時かな。ただ、ファシリテーション的なことに興味・関心を持ったのは、中学・高校の頃です。たとえば、中学生の頃から、親子サマーキャンプで子どもたちがテントで寝たあと、親を集めて子育てについての議論を喚起するなど、社会教育活動みたいなことをやっていました。その頃から、みんなで顔をあわせて本音で議論するような場を作ってきたんです。

<FAJ> なぜそのようなことに関心を持ったんでしょうか。

<櫻井> 基本的には学校という空間が嫌だったんですね。学校は嫌いじゃないですけど、日常とは違う非日常がほしかったんです。

学校の外に出て、学生服から普段着に着替えて地域に出ると、学校の中でうるさかった先輩も、そして大人も急に対等になる。その切り替えがたまらな

かったんです。対等でフラットな空間、本音で話せる空間がすごくよかったですよね。それが私のベースになっています。

<FAJ> 学生のころからの流れで、大学の先生になっても社会教育を専門にされているのですか。

<櫻井> そうです。私は専門が社会教育・生涯学習ですが、幸せなことに、振り返ってみると、似たようなフィールドがずっと続いているんですね。社会教育・生涯学習を学びたい、研究したいという信念ではなくて、何となく漠然とした興味があった。

社会教育・生涯学習にはいろいろなイメージがあると思いますが、基本的には地域の人材育成をする仕組みのことを意味します。例えば話し合いの場を作って人材が発掘されたり、強い意見の人と弱い意見の人が対等になったり、一人ひとりの参加意識が芽生えたりっていうのは、まさにひとづくりですよ。ファシリテーションとは言わないまでも、そういった行為は社会教育・生涯学習そのものだと思っているんです。

あえて「勉強しない」のは？

<櫻井> 私のファシリテーションは全部我流で、ほとんど勉強をしていないんです。我流でやっていって、こういう場が必要だ、こうしたらいろんな意見が出ると思ってやっていたら、「それはワールドカフェだ」と言われたり。

<FAJ> その方が本物ですよ。

<櫻井> どうしたら、みんなから本当の意見が出るのかとか、多様な意見が集められるかといったことを、素直に考えていました。けれども、学生にはそれでは通じないので、「ワールドカフェっていうんだぞ」って言ってますが、基本的には、私はそういうことを勉強していません。

ちょっと言い方は悪いけれど、勉強したくないのかも知れませんね。様々なファシリテーションのマニュアルとかテキストがありますよね。私は、そういうものは読まないんです。どうしたら相手の本当の話を聞けるのかとか、話しやすくなれるのかとか、そのことを考えているだけです。だから、前日に若者を相手にうまくいったとしても、今日の相手が高齢者だったら昨日の方法は通用しないわけで、全然違う。

とにかく、相手や地域を実際に見てから考えるというだけは絶対的に必要だと思います。学生にも、そこは厳しく伝えていて、マニュアルに従うやり方はだめだと。相手の顔を見て、そこで考える。相手に応じて手法ややり方を変えなきゃならないって、それだけは本当に大事にしています。

震災での支援活動

<FAJ> 少し話が変わりますが、震災以降、住民の

方々と接して、思いや考えを分かち合う場を持たれていますよね。これは、いつ頃からですか。

<櫻井> 支援という領域で、皆さんを集めて話し合うようになったのは、震災の年の7月くらいからかな。今回被災した自治体は、私が政策アドバイザーのようなかたちで関わっていたところが多いんです。そういうご縁もあって、結構早い段階から現場に入ることができました。入れたけれど、皆さんを集めて大掛かりに話し合いの場を作るっていうのにはちょっと時間がかかりました。

<FAJ> 震災前日の3月10日にも、浪江町の方とお会いになっていたんですよ。

<櫻井> そう、2011年度からの契約で、浪江町の「まちづくりアドバイザー」になるという約束でした。それで、3月10日もその打ち合わせをしていたんです。11日の震災には、宮城県の北の方で、230人の方を前に講演している最中に遭遇しました。だから、結構早い段階で被災地に関わりましたね。

浪江町以外では、宮城県東松島市とか仙台市とか、いくつか復興会議の委員として関わっています。

<FAJ> NHKの番組『明日へ 支えあおう』を拝見したのですが、そのような学生も加えた参加型の場づくりは、浪江以外でもされているのですか。

<櫻井> やっています。東松島市では、200人くらいの同じ地域の人たちに集まってもらいました。道具類を学生と一緒に高崎から大型バスで運んでいって、20～30テーブルくらいに分かれてもらい、「みんな、生きてたのか…」っていう再会から始まって、一気にしゃべっていただいて、それを一言一句記録して、復興計画にリンクさせるっていう、本当に手間のかかる作業を、半年くらいやりました。東松島市では、その場が初めて被災者自身が震災後

にしゃべった場だと思います。みんなが「これからどうなるんだ」という状況の中で集まった一回目の懇談会でした。

浪江町の場合が典型的なだけけれど、今回の大震災の最大の問題は分散避難だと思います。住民の方々は、ばらばらに避難してんです。テレビでは浪江町ってひとくくりに見るだけけれど、当の町民たちは互いに言葉を交わせない状況なんです。だから、あるお母さんは浪江に帰りたかって思っているだけけれど、隣の人も帰る気ているのかなとか、いわきナンバーの車に乗ってるだけでちょっとこっちを見られるけれど、他の方もそうなのかなとか。そういうことをお互いにしゃべったり、悩みを共有したり、それができないっていうのが、最大の問題だと考えています。

だから、とにかく繋がなきゃいけない。それで、テレビでも紹介された「浪江のこころ通信」を始めたんです。あれも、私にとってはファシリテーションですね。町民の意見をあちこちからすくい上げ、お互いの思いを共有して前進させる、そういう手段です。実際には会えないので、まずは「通信」でつなぐ。とにかく思いを共有したり悩みを共有したり、これからのことを考えたり、隣の人の知恵をいただいたりする。そういう場がどうしても必要だろうということを考えたんですね。

対面できない状況でのファシリテーション

～通信やテレビ番組の活用～

<FAJ> すごく大きなポイントだと思うんですけど、ファシリテーションとかワークショップっていうと、リアルに人が集まって話をする場をイメージすることが多いと思うんですね。けれど、「浪江のこ

ころ通信」は、実際には人が会っていないわけですよ。会えない状態にあって、それでも思いをつないでいくっていうのも、やっぱりファシリテーションだっていうイメージなんですね。

<櫻井> リアルに集まることができないから、その状況でつなぐ方法は何かと考えたときに、「浪江のこころ通信」にたどり着いた。役場に突入して行って、「取材は我々がやるけれど、印刷と郵送のお金がないから、力を貸してほしい」とって交渉した。町の広報誌である「広報なみえ」がまだ発行されていない段階だったので、「その紙面の半分を欲しい、一緒にやらないか」とっていう話をした。つい先日、2年間一緒にやってきた職員から、「そのときは、とうてい無理な話だと思っていた。それでも先生がやるっていうからやってきたけれど、今日まで何のミスもなく実現してこられたのは、誇れることだと思う」という話を聞きました。それくらい途方もない作業だったのですが、定着してきましたね。

<FAJ> 「浪江のこころ通信」を進めるうえで、一番難しいと感じていたのはどこですか。

<櫻井> 行政からすれば、NPOとか我々は、どういう存在なのか、信頼できるのかわからない。そういう人たちが、本当に取材に行っちゃんと原稿を集めてくるのか、信じるのがちょっとできなかったかもしれませんね。職員たちは自分が行けないから。

さっき徳田さんがおっしゃった、「直接会って話し合う場以外でもファシリテーションできる」というのは、まさにその通りで、今回の震災、特に原発事故は、会って話すということがかなり難しい状況になってしまったということなので、これに対してどう応えるかが重要なんですね。だから、テレビで紹介されたワークショップも、まさにそのための仕掛けなんです。NHKと何回も打ち合わせをして、

番組のなかで実際に町民が会える、意見が言えるような場を作れないかと。テレビを見た浪江町民が、私も意見を言っているんだ、俺もこういう場をつくってみたいという、そういう思いを促すような材料にならないかっていう。

<FAJ> なるほど。番組づくりもファシリテーションの一つなんですね。

ワークショップの場が「他人ごと」から「自分ごと」になるきっかけに

<櫻井> そうですね。町民が「離れていても俺たち浪江町民だよな」「遠くにいたって浪江のためにできることあるよね」って、自分たちでいろいろな提案を行う。そして、あの番組で提案されたことは、実際に各地で実践されています。それをファシリテーションって言うかどうかはわからないけど、みなさんの動きを促進しているわけです。

たとえば、埼玉に住んでいるある女性は、自分で交流のためのグループを結成して、復興の主体となっているんです。つまり、自分が動かなきゃならないんだなって思うところから人材が育つ、そういう流れができてきているんですよ。全体をずっと見てきた人間にしかわからないですけど、確実に人材が発掘されて育っている。被災者という側面だけではなくて、まさに復興の主体になれているんです。

<FAJ> そうですね。よくワークショップでは、「他人事ではなく、自分事になる」という言い方をしますが、被災された方々にとっては、「元々、自分事である」と言えますよね。そのような中で、本当の意味で主体になるプロセスをファシリテートしている、ということですね。

<櫻井> やはり「お客様である」ということではいけ



ない。しかし逆に、「主体になれ」とは言えないんですよ。我々にできるのは、いかにして気づく場面を作っていくかということだと思います。今回の問題は、国や東電の責任もあるけれど、被災者自身が立ち上がってくれない限り変わらない。宮城・岩手の沿岸部もそうで、農業でも水産業でも何でも、被災者自身が立ち上がらない限り、出来ることは限られている。どんなにインフラを整備しても、「そこで再び頑張る」と言ったり、「私は浪江町民です。遠く離れていてもアイデンティティがそこにあります」って言ってくれない限り、町の再生はあり得ない。そういう場面を作るのが、徳田さんも含めて、ソフトを専門にしている我々の役割なのではないかということなんです。

<FAJ> 「浪江のこころ通信」以降は、どのような働きかけをされているのでしょうか？ たとえば、先ほどの埼玉で立ち上がった方に対しては、具体的にどんな働きかけをされているのでしょうか。

<櫻井> 「プロセスを見守る」ということでしょうか。皆さん、心境がどんどん変化していくんです。例えば、先ほど例に挙げた女性は、最初は「浪江には帰れない」と言っていたんです。ところが最近は「先生、私帰りたんです」と変わってきている。「帰る」と言っているか、「帰らない」と言っているかという

結論が大事なのではなくて、最初「帰れない。子どもを思ったら帰れない」と言っていた人が、やはり故郷に帰りたいという思いに辿り着いたという、その一連のプロセスを知っているということ、見守ってあげるといこと、誰かが証言してあげるといことが、その人にとってすごく大事なことなんです。色んな悩みとか、葛藤があって、その結論に至っている訳ですから、その全体像を見てあげること。それがファシリテーションかどうか分からないけれど、結果だけを見て「大丈夫ですか」とか「素晴らしいですね」とかいうのは、全然寄り添いじゃない。自分の学生にも、そして自分自身にも、「寄り添うってというのは、一連のプロセスを見守ることだ」って言い聞かせています。

一連のプロセスや変化、経過を見守って、「この前、このようにおっしゃってましたよね」と言っていると、「いや実はそうなんですよ、私は今、変わってきたんです」といった言葉が出てくる。それだけで元気になると言っておかしいんだけど、「そこまで見てくれてるんだな」とか、「自分を分かってくれてるんだな」と思うことで、もっと頑張ることができる。

だから私は、「浪江のこころ通信」でも講演でも、「皆さんの声を記録することが目的じゃなくて、後世に伝えることが目的なんです」と言っています。たとえば孫の世代に「自分のじいちゃん、ばあちゃんは、原発が怖くてこの町を捨てて出て行ったんだ」と片付けられたら、あまりにも可哀想です。「この記録にあるように、じいちゃん、ばあちゃん達はいろんなことを悩んで、葛藤して、その結果、東京に暮らしているんだ」となってほしい。

何のためのファシリテーションなのか

<FAJ> 変化を見守る、証言するということが重要になるのは、分散避難が強いられているという状況だからこそなのか、それとも、そうでない現場でもそれが肝になるのでしょうか。

<櫻井> ファシリテーションって、何のためにあるのかっていうのは、皆さんの方がお詳しいとは思いますが、私は「自分への気づき」のためだと思う。自分の意見を言ってすっきりしたというだけでは、全然ファシリテーションじゃなくって、自分が意見を言って、他の人も意見を言って、その時にどう感じるかです。ね。「俺の言っていることを、なんでこの人分かってくれないんだ」と感じている段階だと、ファシリテーションとは言えないように思う。そこから一歩進んで、「自分の考えって、結構稀なんだな」とか、「自分って、結構いいこと言ってるな」とか、そういう自分への気づきを、どう促していくかということが大切だと、学生にも言っているんですね。だから、私がファシリテーターをする時には、私も私を知るんですよ。「この人、今日喋りづらかっただろうな」とか、「何で今日はこんな風に問いかけちゃったんだろう」とか。「この次はどうすればいいのかな」とか。徳田さんもそう思うことがあると思いますが。

<FAJ> そうですね。

<櫻井> 「なぜ『浪江のこころ通信』を始めたんですか？」といろいろなマスコミから聞かれるんですけど、さっき「記録のため」と言いましたが、最終的には「自分のためです」と言っているんです。私も皆さんの声を聞かないと、自分自身が次に何をしないといけないかが分からないし、動けないんです。たとえば講演をする時でも、実際に聴衆を前にしないと何を話せば良いか分からない。だから、取材を

することで町民の声を聞く。そうすれば、「自分は次にこういう仕組みを作って行けばいいんだ」とか、「こういう働きかけをすればいいんだ」、「浪江の復興会議でこういう発言をすれば、町民の声を代弁していることになるんだ」とか感じられる。「自分が何をすべきなのか」とか、「自分は何でここにいるんだ」とか、「何のために生きているんだ」とか、そういう自分への気づきというか、自己理解のためになる。すごく仕事がしやすくなるというか、本当に円滑に進むようになる。だから、皆さんの声を聴く時間が1～2週間無くなると、「次に何したらいいのかなあ」って気持ちになるんです。聴けば聴くほど楽になる。

復興プロセスと自己理解

<FAJ> よく、場をファシリテートするという言い方をしますけれど、それは「ファシリテーターを除いた場」ではなくて、「ファシリテーターも含めた場」なんですよね。場を促進するプロセスで、自分も気付いたり、感じたりする。そこは忘れがちですよ。

<櫻井> 「この場をどう作るか」とか言うし、私だってそう思うことはある。でも、それで終わっちゃったら、私がここにきた意味がなくなる。

その場が楽しくてしょうがないんです。聴いていて楽しいのではなくて、「自分が次にやることが見えてきた」というような瞬間があつて、楽になる。地域づくりとかファシリテーションもそうだと思うけど、課題を解決することが我々の最大の目標なんです。大震災っていうとてつもない課題で、課題だらけのはずだけれど、課題が見えないと仕事ができないんです。課題って、言い換えると住民ニーズであつたり、市民ニーズ、被災者のニーズであつたりする。ファシリテートすることでそういうものが見えてき

て、「あっ、これを解決すればいいんだ」と、やることが見えてくる。自分が何をすべきか見えてくるし、自分自身が何者かが見えてくるから、すごく楽に、楽しくなる。まあ、楽しくなるという表現はよくないかもしれないけど。

浪江町ひとつとっても、これまでいろんな仕掛けを作ってきたし、今も現在進行形で作っている。それは全て、町民の声を元に作り上げている。自分の学説とか自分の理論とかは使えない。その場その場に応じて作り上げていくこと、相手に寄り添うことで、初めて見えてくるということは、大震災でないとしても大切です。

いろんな首長さんに、「先生、専門家なんだから、こういう風にやれってメモで渡してくれたらさ。それ俺やるだけだから」などとよく言われるんです。

「そんなの出来る訳ないでしょ」と言うと、「だって、他の町で言っている同じことをこの町で言えばいいんだろ、先生」と言われるけれど、それはあり得ない。町ごとに住民の力も違うしね。

だから、いつも「住民に会わせてください」「この市役所の外に私を出してください」といったことをお願いするんです。市民に会わないと何したらよいか絶対分かりませんね。「またまた恰好いいこと言つて」と言われるんだけど。これは本当。そこでの自分の役割が見えて来ないと、苦しくてしょうがない。

原発被災者の支援のしんどさを支える工夫

～インプットとアクション～

<FAJ> 支援に取り組む中では、ご苦労や辛いこともありますよね。

<櫻井> 被災者と思いを共にすることが難しいですよ。同じように被災をしているわけではないので。

例えば、浪江の場合。学生も自分自身もそうなんだけど、震災が起こるまで浪江町に行ったことはなかったんです。震災で入れなくなってから何度か防護服を着て行きましたけど、以前に行ったことはなかった。ですので、私はまず地図で、その町の地名を全部暗記するんです。学生にも全部インプットします。思いを共にしたり、共感できる可能な限りの材料をインプットする。「あんたに言ったって分かんねだろ！」と言われるような時でも、「俺、請戸で漁師してたんだ」という話があれば、「請戸って、あの海沿いの請戸のことですよ」と言うと「うん？知ってんの？」みたいな反応がある。それだけで喋り出して、「家は権現堂にあってね」「あー、権現堂って役場のそばですね」「あんた知ってんじゃねえか」といった会話になる。こんな具合で、工夫は丁寧に行っているんですけど、本質的には思いを共にすることは難しい。

<FAJ> そうですね。実際に見た訳ではない、地図の情報だけでは限界がありますよね。

<櫻井> 短時間の内に、「この人なら喋ってもいい人だ」と思ってもらえるか。それは神経使いますね。信頼を得るといことですね。

<FAJ> 情報の事前インプット以外に、信頼を得るた



めに気を付けていることはありますか？

<櫻井> もう「うなづく」しかないでしょうね。「うなづき」ですよ。もう、それしかないかな。私、生まれが山形なんで、福島の方に対する時なら、わざと訛って喋ったり、近づけるための工夫はやりまします。だけどやっぱり、「そうですね」とうなづくことかなあ。こんなに重い事故・被災なんだけど。

かなりの数の町民と会って、誰が親戚で誰が兄弟でとか、町民2万人の全員じゃないけど、関係性が見えてくるぐらい話はしてきました。信頼を得られるには、どうしたら思いを共に出来るかですね。私は『一緒に考えましょう』の精神です」といつも言うんです。私は大学の人間だけど、「こうあるべきだ」とか「こうの方がいい」とは言わないし、言えない。けれども、一歩引いて「皆さん、お考えをどうぞ」というのではなく、自分も一緒に考える主体になることをすごく大事にしている。「どうぞ、どうぞ、皆さんの考えを尊重しますから」ではなくて、「一緒に考えましょう」「私にも一言言わせてくださいよ」とか。そういうことは敢えてやりますね。対等なんだよね。

終わりのない原発問題

～仕事としての一段落とは～

<FAJ> 特に原発の問題って、終わりが無いような状況になっていますよね。仮にですが、「取り敢えず自分の仕事としては一段落かな」と思えるのって、どういう状態になった時でしょうか？

<櫻井> 良く聞かれる質問です。格好よすぎるかもしれないけれど、一段落というものはなくて、浪江町が元に戻ろうが戻るまいが、浪江町民達の歩みをずっと見守ったり、言葉として語れるぐらい理解し

続けるということしかないと思っています。だから、町を復興させるとか、そういうのではなく、どうしたらこの人たちと一緒に歩めるのか、どうしたらより近づけるかってことだけを考えています。どうしたら親しくなったこの人達と一緒に歩み続けられるかって、そこだけです。

町が復興するというのは町の責任だけど、我々の役割は違っている。いつまでですかと聞かれると、いつまでもやっていくことなので、終わりってないと思う。ずっと、ずっと、その人達がどのような生き方をしてきたのかっていうことを、何時か、言えるようになるってということだと思っただけ。ここは、難しいです。誰もが経験したことがないし、私もわからない。

町は5年間で帰還するって言っているんで、残り3年で帰還する、帰るんですよ。だけど、3年後に帰る人って、どれくらい居るかわからない。そして、帰還で終わりかっていったら、そうではない。町を、人々の営みのある町に変えていかなければいけないし、遠くにいる人たちにしても、浪江町民としての生き方が続く訳です。復興って、終わりはないんだと思うんです。

宮城・岩手の集団移転・高台移転のように、ある程度エリアが見えて、町が再生していく期間もある程度見える場合は、関わっていく期間も想定できます。ただ、この原発事故だけは、そのような期間ってないと思います。大げさだけど、人生ここに賭けてみようかなっていうぐらいの気持ちです。関わる上では責任があると思うのです。退職まであと二十数年ありますけれど、その位はかかるのだらうと。ずっとずっと寄り添って一緒に歩んでいきたい。浪江に関わるって決めた時には、そういう覚悟を、夫婦でもしゃべりました。やるからには中途半端は許

されないし。

<FAJ> 櫻井さんは、浪江以外でも支援をされているじゃないですか。1週間とか1ヶ月の単位としての動きは、どんな感じなんですか？

<櫻井> 1日に3箇所ぐらいを一気に廻るときもあります。それで週2日半を使う。土日も入れて4日半フリーにして、その時間で廻れちゃうところはみんな廻っちゃうんです。けれども、だんだん自分がやるエリアっていうのは絞られてきています。浪江町と、FAJの遠藤さんと一緒に活動している東松島市の2つですかね。あれもこれもできないので、絞っていますね。

そして私たちは専門家でもあるので、町が復興するっていうことに加えて、今回と同じようなことが東京や東海地方で起こった時のことを考えて、分散避難という状態に対して、どういう対応マニュアルが必要なのかっていうシステム構築こそ、取り組むべきことだと思っています。まあ、こんな震災は起きて欲しくないけれど、専門的な立場で言えば、そういうモデルを作っているっていうこともあります。ファシリテーションとはまた別のことですね。

復興という言葉のむずかしさ

<FAJ> さきほど、「復興はない、復興という言葉あまり使わない」っておっしゃっていましたが、私も、引っかかっているんです。自分で、復興って言葉を口にした瞬間に、違和感というか、引っかかりを感じています。

1つの肝になってくると思うのですけれど、「復興」という言葉に引っかかりを覚えたりするのはなぜだろうというのを、私は、まだ、言語化できていない

のです。

〈櫻井〉「町が復興する」っていうことと、個人が復興というか自立するっていうことは、当然別のことですよね。浪江町役場の職員研修でしゃべったのですけれど、「被災者のニーズに応えるとか、ファシリテーションしながらみんなの合意を作るとか、求めては間違いだ」って言っています。「では、何のためにやっているんですか？」と言われたら、「納得を得るためです」って言っています。つまり、町に帰るとい人もいれば、帰らないという人もいます。

「全ての町民のニーズに対応していきます」と復興計画に書いてあるんだけど、同じ考えになる訳無いし、対応ができる訳がない。けれども、例えば、わかりやすく言えば、「役場がそこまで言うなら、しょうがねえなあ」とか「俺はこうしたいんだけど、隣のあの人が言うことを聞いていると、しょうがねえなあ、ここで妥協しないと」とか。妥協という言葉は良くないけれど、今自分がやろうとしていることに対して、納得するってことはあり得る。「実感のある復興」という言葉をよく使うんだけど、自分が納得して「そうだよな」って思えるまで、ファシリテーションをやるということだと思います。合意を得るとか、違いを浮き彫りにするっていうことでは無く、その人がどう納得するか、という場面を作ることだと思うんです。

具体的な例を挙げると、この前、宇都宮で「浪江のしゃべり場」をやったんです。冒頭、副町長が挨拶した後、私が「せっかく副町長が来ましたので、何か質問ないですか？」って聞いたら、前に立っている男性が手を上げて、「なっして副町長、国の言うことかかねえんだ」っていったんです。「早く国の言うこと聞いて、賠償金貰えばいいべ」ってことです。それに対して、副町長がまじめに応えよう

としたんで、「ちょっと待ってください」って言って、「他に御意見ありませんか」と会場に尋ねました。会場は、2～3分シーンとしたんですが、それから2人、3人、手が上がってきたんですよ。ある女性が、「私は、国の賠償は貰うべきではないと思っています。同じコミュニティに住んでいた人間が、国の線引き、線量区分によって、賠償額が変わる。それでコミュニティが分断してしまうことは良くない」という意見を言った。次に手を上げた人は、「今、この浪江町役場がでっかい霞ヶ関と向き合おうとしている時に、町民が背中押さんでどうすんだ」と言ったんです。私は、「何で金貰わないんだ」と言った男性は、机叩いて怒って帰るかなって思ったんです。何しろ、自信満々に副町長に質問していたんですよ。「皆がそう思っている。俺が代弁してやる」といった勢いで。ところが会場の雰囲気はそうではなかったわけです。

しかしその男性は、その2時間のしゃべり場に最後まで参加して、帰り際、違う意見を言った人のところに、「実は、俺は栃木を離れて福島に帰ろうかと思っているんだ。これまで1年半本当に世話になった」って、頭を下げて廻って、それから帰っていったんです。

その男性のグループのファシリテーターをやっていた学生の話だと、グループの中でも、「金を貰うべきだ」と言った彼とは違う意見の人達ばかりだったそうです。でも、その人たちの意見を真剣に聞いていて、自分の考えには合わないけれど、そういう考え方もあるんだな、と、自分なりに納得というか、腹に落ちる部分があって、そういう行動をされたと思うんです。そういう場面を作ることですね。

これだけの災害が起これば、全員のニーズを満たすなんてことはあり得ない。しかし、一人ひとりが

言葉を発して、自分がやりたいこととか考えていることを、確認したり、納得したり、実感を持てる、そういう場面を作っていくのが、ファシリテーションだと思う。私が学生に言ったり、浪江町役場の職員研修で言ったりするのは、それなんです。合意よりも納得をする場面作りかなって感じがするんですね。

<FAJ> 関係性とか、人と人との関わりに働きかける人にとって一番の本質だと思うんですけど、自分ひとりで何かを決断することと、他の人との関わりの中で得る納得とは、どう違うんでしょうね？

<櫻井> 先ほどの男性が、どういう考えで帰っていったのかは確認できません。なので、想像ですし、言葉がきれいすぎるかもしれませんが、自分を知る、客観的に自分を見ることができたのではないのでしょうか。仮に結論は同じであっても、ひとりで言い続けるのと周囲と比べるのとでは、たとえ同じお金を貰うことでも、自分を客観視するというか、自分への気づきっていうのがあると思う。だから私は、考えが変わることを期待するのではなく、自分が言っていることがどういうことなのか、被災者の中で自分はどういう立ち位置に居るのか、そういうことが見えるってことだと思うんです。我々は社会的な生き物で、ひとりでは生きていけないので、大勢の中で、今、自分がどういう位置に居るのか、自分を客観視する視点を提供することで、その人は、社会的に生きていけると思う。

後から聞いたら、その方はすごい豪邸に暮らしていらっしゃった方で、建てたばかりの家が津波で流されてしまい、いろんな思いもあったらしい。だけど、廻りと話してからお金を貰うのと、話さないで貰うのとでは、同じお金を貰うのでも、その後の立ち居振る舞いとか行動って、少しは変化して行くも

のかなって思うんです。自分を客観的に見る力はあるんじゃないかなって。

ちょっと雑談になりますけど、私がこの震災で一番考えたことは、「ふるさとして何なんだろう」ってことなんです。どこの人たちもそうかもしれないけれども、浪江の人たちって、子どもから大人まで自慢げに話すんですよ。特に子どもは、「9月になると、こういう食べ物がおいしいですよ」とか、「先生にもこのお祭り見て欲しかったなあ」とか、具体的なんです。私は生まれは山形なんですけど、幼い頃から転々としていたので、自分のふるさとして言えるのかなって、結構、微妙なんです。だから、そういう町民に接すれば接するほど、うらやましい。だけど、そのうらやましい人達が、アイデンティティを失ってってしまうのを、今見ている。その人達にとって故郷って何かなって。誇れるものを失いつつある人たちを、何とかしなければって感じる。自分の役割を知るって言うか。その連続ですね。

…重いですね、震災でも特に原発・原発事故は。本当に復興とか、そういう問題じゃないし。おっしゃるとおり、「何時までこれをやるんですか」っていう問題でもあって、一人ひとりの生き方の問題になる。私たちファシリテーター側も、被災者側もそうだろうし。どこで、いつになれば、納得するだろう。むずかしいね。

<FAJ> むずかしいですね。

<櫻井> 「何時まで『通信』を発行するんですか」っていうのも良く聞かれるんです。「ずっとです」って答えるのだけど、これも難しくなっている。実際のところ、取材拒否も多くなってきているんです。

「もう帰らないって決めたんで」とか。「いや、帰らない方も良いんですよ」って言うんだけど、実際には心が引けるんでしょうね。このまま行くと、

段々、掲載量が減ってきて、どうかなあとか。どんなに努力していても、やっぱり離れていくところがある。

支援のむずかしさ

<FAJ> そうなると、支援って何なんでしょうね。「もういいです」って言う人たちがどんどん増えていったときに、それでもやり続けるのか、相手が望んでいないことだから止めるのか。

<櫻井> そこは難しいですね。例えば、交流会とかしゃべり場をやると、昨年度まで役場はよく支援物資を持って来たんです。東京の国際フォーラムあたりで、私が司会をしながら大規模にしゃべり場をすると、後ろに米が一杯並んでいて、その米とか味噌を抱えて山手線に乗って町民が帰って行くんです。抱えきれないくらい持って、そのまま電車に乗って行く。終わったあとに、職員を集めて「あの姿を見て涙がでなかったか？」って聞いたんです。あまりにもみじめじゃないかって。何でも渡せば支援で、向こうは喜んでるって、本当にそう思うかって。自分の町民をみじめにしていないかって。それ以来、交流会で支援物資を配るのを止めにしたんですが、何も苦情は来ませんでした。

支援するっていうスタンスは、なんか本当にいやですね。対等っていうのはちょっと格好良すぎるかもしれませんが、一緒に悩んで行きたいし、一緒に考えたい。支援しているって言われると、支援かもしれないし、支援と言う言葉を使う時もありますけど、本気で使ってはない。すごくみじめじゃないですか、「支援されてる」のって。

だから今は、「しゃべり場」の運営も、現地実行委員会方式にして、被災者自身が司会をやったり、企

画を考えたりしてもらっているんです。そして、「先生、手伝いに来て下さい」って言われた時だけ私が行ってマイク持ったりする、そういう形式に切り替えているんです。あくまでも「復興の主体になって行く場面作り」だから、あんまり支援って言葉は使わない。「ありがとうございます」って町民が頭を下げる姿を見ているのが、つらくってしょうがない。人って、人に喜んでもらったり、誉めてもらって初めて人になれるのに、ありがとうございます、お世話になりますって、頭下げると、いつまでも人間、主体になれない。やっぱり、ありがとうって人に言われて、人は生きがいを感じたり主体になれる。われわれだって、ありがとうございますって言われて、今日来て良かったなって思う。そういう場面を、町民たちにも作って行かないといけない。だから、あまり支援してあげるって感覚はないですね。私自身は、生涯学習の分野で、「どうしたら人が主体になって生きていけるか」ってことを考えている人間だから、こだわっちゃうのかもしれないけど。

重要性を増すファシリテーション・ファシリテーター ～今の時代が求めている役割～

<FAJ> そもそもファシリテーションって言葉自体が説明しづらい言葉なのに、「日本ファシリテーション協会災害復興支援室」なんて、復興とか、支援とか、自分でも引っかけがある言葉を並べてしまっているんで、常に『何なんだろう…』って、思いながら活動しているんですよ。

<櫻井> ファシリテーションって言葉を使わなくても良いかもしれませんが、今、そういう手法や役割って、絶対必要だと思う。その言葉を認識しているかは別だけど、いろいろなところで、どんどん必要

性が増している。

<FAJ> ファシリテーションは、役に立つんですかね？役に立っているんですかね？

<櫻井> 役に立つし、ますます必要だと思うね。ただし、普通の人は明確に認識しているわけではないよね。でも、こういう働きは絶対に必要。それは、震災に限らず、ありとあらゆる場面でそうだと思う。たとえば先ほどの浪江町役場での職員研修でも、「2年間仕事してきて、初めて本音を言いました」って、意見がどんどん出てきたんです。模造紙が、すごい一杯になっちゃって、どのテーブルも同じような意見。「縦割がひどすぎる」「自分がやっている役割が全体の中で、どう役に立っているかわからない」「仕事を引き受けてしまうと、自分に全部押ししかかってくる」とか。

これは震災が無くても、行財政改革を進めていく中では、人を増やすわけにいかず、いまいる人たちだけでやって行くしかないわけで、そういう人たちの力を喚起するためには、本音が言える場面を作ることができない。だから、ファシリテーションの必要性は増していると思います。こういう時代だからこそ求められる役割だし、その上で大震災っていうとてつもない危機が来ちゃったんで、益々必要だっていうわけです。社会が必要だと認識しているかはさておき、そこにいる人たちでやって行くしかないんだから、必要ですよ。

復興とスピード～行政と、住民と～

<櫻井> 私は、行政の人に「復興予算をいくら組んでも、道路を整備したり工事の議論だけしていても、何も変わりませんよ」といつも言うんです。そこにいる町民たちが、頑張ると言ってくれない限り何も



始まりませんと。町民の方々がそういう納得を得るためには、復興のスピードはもしかしたら早すぎるかもしれない。安倍政権になって、これからどんどん工事が進むと思うんです。防潮堤が立ったりして。たぶん、そのスピードが速すぎて、我々は困るんじゃないかなって思う。復興が遅い、遅いって皆言うけど、一人ひとりが実感を持って納得したり、進むべき道を確認するには、時間が早すぎるという捉え方も必要ではないでしょうか。

<FAJ> 「早すぎるかもしれない」ということ、よくわかります。丁寧に時間を充てるってことは、大きな意味を持ちますよね。

<櫻井> 先ほど言った埼玉の女性も、ここ2カ月くらいで「あおぞら」ってしゃべり場を自分たちの仲間立ち上げたんだけど、「一歩踏み出すのに1年半かかりました」って言うんですよ。つまり「やらなきゃならない」って、本当に腹に落ちて、歩みだすまでに1年半かかった。人って、それぐらい時間がかかるんです。サクサクと整理できる人もいるかもしれないけど、一人ひとりが納得するには、本当に時間がかかる。

<FAJ> お話を伺っていて思うのは、復興とか、支援とか、ファシリテーションとか言っても、最終的に

は自分自身の問題なんだなっていうことです。現場に行きたい、話を聞きたい、何かをしたい、役に立ちたいという衝動がまずあって、そこに、たまたまファシリテーションというものが身近にあった。だから、ファシリテーションとともに、人々の輪に加わる。

<櫻井> こういう話、あまりまじめにしゃべったことがなくて、今日は自分のよい振り返りになりました。

<FAJ> 本当にお忙しい中、お時間をいただきありがとうございました。

篠原 辰二 さん

NPO法人 Facilitator Fellows 理事・事務局長

人と人を、人と組織を、人と自然が結び合う多様な「場」の実現を通して「共創社会」の実現を目指して、ファシリテーション・対人援助や人間関係に係る研修機会の提供などを通して、市民活動実践者やファシリテーターを育成している。

東日本大震災では、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（事務局：中央共同募金会、さくらネット）からの派遣要請を受け、災害ボランティアセンターの運営支援を実施した。



NPOを設立した思いやきっかけ

<FAJ> ファシリテーター・フェローズをつくったきっかけとか、思いとかを教えてください。

<篠原> 元々ファシリテーター・フェローズは、2002年に実施した対人援助職のスキルアップを目的とした勉強会から始まっています。当時、僕は社会福祉協議会（社協）の職員で、社協の仲間達と4～5人で集まって自分達のスキルアップの方法について話しているうち、体験学習法というのがあることがわかりました。しかも身近に体験学習法に詳しい人がいたので、その人をお招きしながら年に3回位ずつ勉強会をやっていました。そこで体験学習の仕組みとか、ファシリテーターの在り方とか、そういったことについて深く勉強したのがベースになってきました。そうした学びの場が8年経とうかという時に、もっと自分たちがアクションを起こして、体験学習の場をつくって、それを必要としている人達に提供できた方がいいんじゃないかということで、法人化をしたのがファシリテーター・フェローズです。

<FAJ> では、はじめは皆さん対人援助のプロとして、

体験学習を勉強しようかと？

<篠原> そうです。自己の学びから始まっています。名古屋の南山大学で毎年12月に日本体験学習研究会がありまして、その8回目の時に初めて僕らもお邪魔させてもらったのですが、そこで、北海道で活動している人達との出会いも多くあって、もっと場づくりがしやすいように、任意団体ではなくてやはり法人化しようという動きが出てきたんです。最初は福祉とか医療とか看護とかに従事していた人達の勉強会が、だんだんボランティアグループの人とか、主婦の方とか、色々な人達が「この勉強会は面白いね」と関わるようになってくれました。自分達の仕事の範囲以上に、効果や成果が広くありそうだから、いろいろな人達に体験学習の学びの場を提供したいな、という思いに広がっていきました。

<FAJ> 専門家が専門家として勉強していたところから、だんだん開いていったという感じですね。

<篠原> 今思うと、法人化前の集まりってというのは、同じ業種の人達が集まっているからこそ深い話ができたんですが、それは、自分たち同業種の狭い囲いの中での価値観なのです。でも今は行政職員さんや

教員、自衛官とか主婦の方とか、学生さんとか、異業種の皆さんと研修をするので、いろんな人達の価値観や思いを聴くということもでき、本来の人間関係のトレーニングにも通じていくだろうなあと。

<FAJ> 確かに、同じ系統の方たちはばかりで学んでいると限りがあるでしょうね。

<篠原> 同業種ばかり集まると研修よりも日常の仕事の話しや愚痴なども多かったですね。今考えると、何かつまらないことやっていたと思います。今のよ様な異業種の人との研修は、人間関係を学ぶ絶好の場だと思っています。

<FAJ> でもみなさん同じようにその方向に行こうとされたわけではなくて、場を開くことに共鳴する仲間がいらっしまったのですね。

<篠原> そうですね。それから、単に学びの場を継続していただくだけではなくて、それを理論化や体系化し、実践していくことの重要性にどこかで気付いたような気がします。形に残したいということもありますし、ただ学びを継続するだけではない何かを・・・、という思いが少しずつ芽生えてきたのではないかと感じます。

団体名を決めるプロセス

<FAJ> 元々のご職業は対人援助のプロであり、体験学習をされて、そこから支援者・促進者、つまり、ファシリテーターという役割を感じられて、それが法人のお名前になったんだと思いますが、命名のプロセスを聴かせてください。

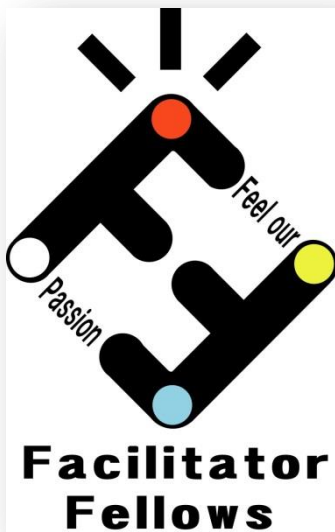
<篠原> ファシリテーターという名称を使いたかった、というのがまずあるのですが、フェローズのほうは、ある仲間が、自分で会社を興したらこのフェローズって言葉を使いたいと言っていたのです。心

理学の研究者の間ではフェローという言葉を使っているし、研究家集団のことを「〇〇フェローズ」と呼ぶところもあるということも仲間から聞きました。ただ、仲の良い人達というだけではない感じがしました。仲間たちの集まりと研究家集団、どっちの意味でも使えるような名前だし、ファシリテーター・フェローズはゴロがいいよねと。実は名前より先にロゴが決まったのです。(ロゴを見せながら)ファシリテーター・フェローズと言う名前はどうかと話していた時に、ロゴをデザインしていると、今のロゴの素案が出来ました。「これ、体験学習で僕らが勉強していた4つの循環過程にできるね。」といったことを話しているうちに、このロゴになったのです。Facilitator と Fellows の両方の頭文字であるFを重ねることで真ん中にHの文字が出来ているのですが、それは学びの中で大切にしている“ヒューマンリレーション (Human relation)”と、拠点とする“北海道 (Hokkaidou)”の頭文字「H」です。法人化に向けて半年くらい話し合いを繰り返す中で、名称よりもイメージが先に出てきました。上の3本の髪の毛みたいなのは、気付きとか閃きとか成長みたいな躍動感を表しているのです。

ファシリテーター・フェローズの一番の目的は、多様な人達や組織が集う場づくりをして、その場づくりを通して得られた経験や体験が社会づくりに役立てばなあというところなのです。

僕らが一番大事にしている理念が、共に創り出す「共創」です。今の世の中、専門家の人達や行政機関の中、密室の会議で決まっているものがいっぱいある中で、時間はかかるけれど多様な人達が集まって物事を決めていくとか、一緒により良い社会づくりを考えていくという、プロセスづくりに役立ちたいという思いから、法人を設置した一番の目的に「共

創」という造語を使っているのです。



共創社会の実現に向けては一人ひとりがファシリテーターとして存在し、その人達が活動することによって、ファシリテーションが広がっていくわけです。そ

んなことをイメージしながら造った組織です。

私が考えるファシリテーター像

<FAJ> みんながファシリテーションを持っていることが大事といったことを、どこかに書かれていますね。

<篠原> そうです。夫婦の間であっても親子の間であっても教師と生徒の間であっても、どんな場面にもファシリテーターが存在する、そういう考え方に共鳴できる人達をどんどん増やそうと。「世界人類総ファシリテーター化計画」を唱える会員もいまして、一人ひとりが誰かの支援者であるとか、場づくりの援助をする人であるとか、ファシリテーターという役割を持った人間であるということを少しずつでも広めていきたいと思っています。

<FAJ> F A Jの中にも近い考え方があって、いつかはF A Jの役割がなくなって、「あの頃は、あんなわざわざらしいことしていたよね。」と言うような時代が来るといいよね、と。

<篠原> 昔は必要だったけれども、今はもう必要なくなったとか、もう皆がやっているじゃないかと、そんな社会になるといいですよね。

共創だって、これからの社会の中で、何か考えたり作ったりする時にはみんながいろんなものを持ち寄ってワイワイとやっていくような場づくりが、普通に行われるのであれば、ファシリテーター・フェローズが存在していた意義があるし、活動がひとつ終わっていくのかなというイメージはあります。

今、ファシリテーター・フェローズの会員は43人(2012年12月末時)ですけれども、本当に多種多様というか、25歳から70幾つまで、平均年齢を調べたら38歳。僕が37歳ですから、だいたい平均くらいですね。最近は市民活動をされている主婦の方が多いです。それから行政職員さん、大学や高校の先生達も増えてきました。そういう方々に、何かお役に立てることございますかって聞いたら、こういう学びの場が楽しい、実際の大学の講義や演習でも使っていきたいとか、そんなお話をされています。

普段の活動～災害支援とファシリテーション～

<FAJ> 普段はどんな活動をされているのですか？

<篠原> 一番の活動は体験学習ファシリテーターの養成講座で、2002年から1年に3回ずつの場づくりをしています。その他にも、講師や研修、行政の研修のアドバイザー活動とか、そういった依頼が多くなってきています。僕らが主催する事業は、年3回の研修の場しかなくて、それ以外は何かオファーを受けたところに応えながら、そこで私たちの活動を周知して来るようなことしかないのです。実は養成講座以外の目に見える活動が少ないのが一番

の悩みなのです。

本来なら、自分の思いを持って、自己実現のために入会される方々は、この会の理念である共創社会の実現のための応援団、もしくは活動者として入られているわけです。その会員さん達が活躍する場が少ないんですよ。FAJのように多様な活動があちこちであり、そこに会員達が関われる機会を提供することができていないのです。だからその機会を少しずつ作っていきとしていて、広報活動や研修プログラムの開発を、会員が参画する委員会を組織するという動きがやっと今年から出てきました。

<FAJ> ファシリテーター・フェローズを作られた時に、最初から定款に災害支援を入れていらっしやるのですね。普通は思いつかないですよ。

<篠原> 定款の主目的事業の中に災害派遣活動を謳っています。全国で大規模な災害が発生すると、中央共同募金会さんが事務局を持つ「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議」というネットワーク体があるんですけども、僕が社協の職員をしていた時に、そこからの派遣要請を受けて被災現場に行き、災害ボランティアセンターの運営支援をして来るというような役割があったのです。2009年に中国・九州北部豪雨災害があった時に、僕は初めて山口県防府市に赴任して、大変な状況でありながらもひとつひとつ物事を形づくっていったり、現場が疲弊している中でその方々の状況をふまえた支援をしたり、場合によっては、敢えて支援をしない支援をする、というのは、それこそファシリテーションだとその時に気付いたのです。

それからはファシリテーター・フェローズの仲間たちにも、ファシリテーターのスキルとか考え方は、絶対に被災の現場には必要だと訴えてきました。また、僕らも教材開発の際にいくつか災害や防災をテ

ーマにした教材を作って、地域防災としての学習会をやっていたので、ファシリテーションは、災害に備えた活動にも必要だろうと思っていました。災害救援活動を定款に入れる時に、仲間内ではこれホントに入れるの、入れても活動はしないのでは、という議論はありましたけれど、やはり定款に記載して、災害にも取り組む意思表示をした方がいいということになりました。これから先、北海道内で災害が起きたときに、きっと自分たちも会員さんたちと一緒に何かしらファシリテーションを活かした支援活動ってできるのではないかといいところもあったのです。

東日本大震災の被災者支援・復興支援の活動 ～支援とファシリテーション～

<FAJ> 篠原さんは3.11以降、岩手に入られていますが、初めはどんな形で入られたのですか？

<篠原> 東日本大震災が発生した時も、派遣要請があったので、組織としての多様な支援のあり方を考えました。その結果、ファシリテーター・フェローズの会員さんにも支援を呼びかけて、発災直後の3月15日からボランティアセンターのマップ作りのお手伝いを始めました。災害ボランティア活動支援プロジェクト会議のウェブサイトの中で、日本全国どこにボランティアセンターが設置されたのかを、グーグルマップ上に可視化するものです。当時、ボランティアさん達が東北をめざす時に、どこにボランティアセンターが設置されたのか、現地の情報が掴めない状況の中で、かなり活用いただいたのではないかと思います。

支援プロジェクト会議の方からは、実はウェブ上で閲覧できるマップを作りたいけれども、やれる人はいないだろうかと相談がありました。じゃあ僕は

現地に行くけれども、地元の北海道から会員さんもできる支援といったら情報をまとめることだろう、ということで取り組ませていただきました。

<FAJ> その当時は情報収集するのめたいへんだったろうと思います。

<篠原> 毎日というか、1日に何回も状況が変わるので、新聞記事やマスコミの報道をチェックしながら、「〇〇市で災害ボランティアセンターが立ち上がったって報道がありましたけど、本当ですか?」、みたいな確認をする、ということもありました。どこまで情報を網羅できたかという検証はできていませんが、何かしらの支援は出来たと思っています。

僕が最初に岩手に入ったのは3月23日からで、そのときは沿岸の情報が、つかめきれていない状況のため、被災地の情報の整理をする役割や、全国のボランティアから「支援にいきたい」という問い合わせを整理していく役割、限られた期間の中で、今後の支援計画を作っていくなどの作業が出てくるわけです。ただ、僕たちは当時、岩手県社協さんへのご支援を中心に行っていましたので、支援方針の意思決定に必要な知識とか、その後の見通しだとかを少しずつ付加していきながら、一緒に行わせていただきました。

僕らは災害ボランティアセンターの運営を支援する役割として入っているので、ボランティアセンターが円滑に運営されるためのヒト・モノ・カネ・情報を、外部から持ってきたり、課題となっていることを解決するための方策を考えたりというような役割を担っていました。

例えばある支援先では、2011年の5月の連休の時に、土嚢袋が足りなくなるという状況がありました。大型連休に被災地を応援するボランティアさんたちが、たくさんいらっしやっただのと、実家の支援に帰ってきた家族の方とかが重なって、ボランティアセンターで用意していた土嚢袋が一日に何千枚となくなってしまうました。そういった状況に対して、私

たちは、ブログを作って、「今、この物資が足りない。自分たちで持ってきてくれないだろうか。」と、これから来るボランティアさんに発信したらどうかと、提案しました。そのツール開発をうちのメンバーがサポートさせていただいたのです。そうすると、もう翌日に、土嚢袋がどんどん届くわけですよ。足りなかったらすぐ送りますよ、とか、実際に持ってくるボランティアさんがいたり。ボランティアセンターの運営をされている方々だけでは、日々の業務に追われて情報の発信はなかなかできなかったのです。土嚢袋に限らずタイムリーな情報を発信することによって、ボランティアさんに対する情報提供とか、注意喚起とかもできますから。そういったツール開発を提案し、実際に取り組むということもしました。

<FAJ> ブログを作りますとか、本当に、支援としては何でもやります、という感じですね。

<篠原> 実は、そういう課題が、ある程度浮き彫りになっていたので、そうしたツール開発に長けている会員を支援に当たらせました。しかし、5月の連休といっても短い期間ですから、もし、現場がボランティアさんたちの対応で追われ、僕たちの提案をお伝えするような状況でなければ、実施できなかったですよ。地元の皆さんとの関係性を構築する中で、いいタイミングで物事を進めていけました。

同じ時期に、僕も別な地域で支援をしていたのですけれども、そこでも同じように、情報発信のツール開発の需要がありました。内陸に住んでいて被害を受けていない方々に、どうやって被災した方々への支援の必要性をアピールして、地元の人たちで支援活動を展開するのか、ということが課題にありました。紙媒体を使って市民のためにあちこちにポスティングする提案を行い、その配布資料を作らせていただきました。

意思決定の現場でのファシリテーション

<篠原> 社協が設置した災害ボランティアセンターでは、本来その業務を担うはずの職員も亡くなられ

ていたり、大変な状況の中で、組織の体制や今後の業務のあり方を形にするための、組織作りの支援をしていました。外部からの支援者も受け容れながら組織を運営するような仕組みづくりを紙もペンも建物もない中で一緒に考えたこともありました。持参したマジックとポストイットが重宝しました。

<FAJ> 組織を作っていく中で、ポストイットを使って「こうしたらどうですか？」と、そこはファシリテーターとして現場の支援を？

<篠原> 意思決定の現場のファシリテーターです。大変な混乱の中で、みんながこれから先をイメージできない。それを形作っていくためのお手伝いを少しずつさせてもらって、「あっそうか。こういうふうにやったらできるのかもね。」と、前向きな部分を少しでも持っていただけるようなお手伝いをしていましたね。

<FAJ> 今回、東北に行き、いろんな社協さんと一緒にになると、本当に市町村によってそれぞれ違うなと思います。ある市はウェルカム系でね、今日行く所がなくてもボランティアを受けちゃう。一方、別な市では結構厳選しているように感じました。

<篠原> 慎重なところもありましたね。それぞれリーダーとして存在している人の権限がどこまであるか、というところも関係しているようです。そういう権限を、委譲したほうがもっとうまく回るんじゃないかという、組織的な部分へのアプローチをすることもありました。ある社協では、ボランティアセンターを運営する若い職員さんたちへの働きかけをしたり、事務局長さんとか会長さんには提案書のようなものを作成して現状の理解をすすめたり、権限の移譲の検討をお願いしていました。

<FAJ> 権限委譲は大きいですね。FAJ復興支援室の活動も、毎回理事会での承認を待たなければいけなかったとしたら、途中でいやになっていたでしょうね。即日即決したいから。任せてもらえたことは本当にありがたかったです。でも権限があれば、間違方向に行く可能性もある。委譲ってそういうことですね。

<篠原> そうです。そこは本当に難しいなと思いつつも、でもその状況を改善して円滑に動かすために、足かせがあったり、心配があれば、その心配を払拭してあげたら動きやすいとか、それら心に作用していくのもファシリテーションだと思います。

ファシリテーターのジレンマ

～ゆっくり関係づくり×素早く仕組み化～

<FAJ> その時の場づくりは、まず関係性を作って受け入れてもらう中で、組織図を作っていくとか、何か自分たちが決めていくための支援だと思うのですが、難しいなと思ったことは？

<篠原> たくさんありますね。僕らが一番大事にしなければいけないことは、自分の言動が、どういう風に相手に伝わるかということです。傍から見ても、こちらは支援する側、相手は支援される側の関係性になってしまうので。一緒に考えようというフラットな状態にしているつもりでも、平等の関係性や感覚が築けていなかったら、支援する側がこう言ったから、じゃあそうすればいいや、となっていくかもしれないので、その関係性の持ち方には本当に苦労しました。

関係性を作るためには、「これができます。」「あれができます。」というような一方的で変化を与えることは言わないように心がけました。むしろ「一緒にいますから。」と横に寄り添っているだけとか、「大変でしたね。」とか、「身体、大丈夫ですか？」みたいなことで、横にいる時間を長くしたり、ということ、3月から5月の混乱の中ではしていました。

<FAJ> 関係性をゆっくり作っていきいたいという思いと、混乱しないために早くボランティアセンターで組織図を作りたいという思いと、ジレンマですよ。しかも勝手に決めるのではなくて、みなさんが納得できるものをお手伝いする、というところに葛藤がある気がするのですが、そこはどうですか？

<篠原> それは、僕らがずっと十数年やってきた研修の中でもあるのです。ファシリテーターがグループ

への介入に、すごく悩んだりだとか、葛藤を覚える場面ってありますよね。「今ここで介入した方がより良い学習の場になるんじゃないだろうか、でもそれを伝えない、介入しないことで、自分たちの力で、良い学習の場に行けるのではないだろうか」、という見方は、実は、災害の現場でも同じことがあると思うのです。今、大変な状況にある人たちが、一歩でも二歩でも前に進めるような、エンパワーメント・アプローチをしていかなければいけない時は、僕らも自分たちのあり方を、ぐっと我慢するような関わりが必要です。被災から3年目を迎えていますので、ある程度体制的に整ってきた組織に、「じゃ、次のステップはこうだから、あれしましょ。これしましょ。」という関わり方はしていません。たまに行っては、「最近、どう？」と様子を聞いて、必要であれば関わるし、必要じゃなかったら「じゃ、また来るから、元気でね。」と。そんな感じの程よい関わりを続けています。

福祉の仕事の経験が生きていること ～その特性とファシリテーション～

<FAJ> 篠原さんは福祉系の大学を卒業されて、社協で、支援のプロとして仕事をされて、言わば、もともと心が福祉の方だと思うのですが、さらに体験学習を通してファシリテーションを学んだことで、なにか、福祉の分野との働きかけ方の違いを感じられ



ることはありますか。

<篠原> 僕が、感覚的に感じているのですが、最近の福祉的な支援者は、相手の弱いところや課題を見つけることが得意で、そこに向き合うのが自分たちの役割だと思っている人が多いんです。この人には障害があるから、あるいは生活に困窮している人たちだから支援が必要だ、その支援のために私たち専門職がいるとか。でも、障害を持っていても、その人の強みを伸ばすための支援を考えるのが、本来の福祉的な支援のあり方だと思うのですが、どうもこの震災支援であちこちから来られる福祉系の方々を見ると、課題探しをするタイプの人たちが非常に多いと思いました。「災害ボランティアセンターの課題はここで、それに対応するためにはこうしなければいけないじゃないですか。」という課題解決型の提案をしてくるのです。僕らは「ちょっと待って。今こんなことができているのだから、そこを伸ばしていく方法は考えられないかな？」と思うのですが。

<FAJ> 課題を見つけることが目的化している、ということですね。

<篠原> ピンポイントで、ここだ、と思った所に集中的に支援していくようなタイプの人たちが、福祉系には多いという印象が僕の中にありました。厚生労働省の補助事業を活用した調査研究で、岩手県で活動している、“NPO 法人いわて GINGA-NET”が、沿岸に送り届けている、若い学生さんたちのボランティアを対象に、アンケートを取ったことがありました。その結果では、保健・福祉・医療・看護等の大学に行っている人たちの参加理由の多くは、日頃、自分たちが勉強していることを活かして被災者を助けたいと思っていることがわかりました。実際に被災地でのボランティア活動を経験してみると、仮設住宅ではある程度のコミュニティ形成が既に図れていたり、課題はありながらも、みんなで生活を維持している状況を目にするわけです。課題を抱えている人達や悲観に暮れている人が多くいて、街中にながれきが散乱しているというイメージを持っている学生も少なくないのです。こうしたイメージと現状との

ギャップから、「私たちは何をしにきたんだろう？」と、役割が見えなくなっちゃうんです。それに比べて他の学生たちは、仮設にお住まいの方々とか、支援をしている自治会長さんのお話とかを聞いて嬉しかった、楽しかったと、モチベーションが上がっているのです。アンケートで、僕らがなんとなく思っていたところが見えてきたのですね。やはりファシリテーターは、被災地の現場では特に、場の様子をしっかりと観察できるスキルが求められるし、一方的なものの方で入ってしまうと、本当の全体が見えなくなってしまうところがあると思っています。

<FAJ> 福祉の目、支援の目とファシリテーションがつながって、いろんな視点でその場を見ることができるようになった理由は何でしょう。

<篠原> やはり、社協での勤務経験が大きいと思います。以前勤めていた社協ではコミュニティー形成支援の仕事をしていました。そこに住んでいらっしゃる人達への地域支援は、通常は、“市町村”というエリアでものごとを考えますが、地域のいろんな診断とか、調査をしていくと、そのエリアの中でも様々なことが起きていて、もっと細かなエリアに分けて調査や分析をしなければ役に立たないとわかりました。地域とひとくくりにしても、そこで起きていることや起きていることの要因や背景を分析するってすごく大事だということに気付いたのです。

災害の現場に行ってもそうなので、よく他の支援者とぶつかったりするわけです。「えっ？なんでそこに関わってくれないの？」とか、「なんでそんなこと今更するんですか？」みたいなのが、支援者同士でもあるのですが、課題ばかりでなく、その課題がなぜ生まれるのかというところを突きとめていかないと、実際に課題に向き合うことにはならないなと思って仕事をしています。

<FAJ> 篠原さんと同じ、運営支援者という立場の方々の間にも価値観の違いはありますか？

<篠原> ありますね。その人その人のタイプというか、支援者のあり方をそれぞれ持っているんで、みんなが同じ思いややり方で、支援に入っているわけで

はないんです。その中で合意とか話し合いもありますが、支援者でこうしようと合意しても、現場にいる人たちとの関係の中でできるかどうかは変わってきます。ですから多様な価値観とか、視点や目線を増やすことの協議や話し合いは、本当によくやっていますね。

<FAJ> そこでも、ある程度ファシリテーター的な関わりをされているのですか？

<篠原> そうですね、そこでは会議のファシリテーション的な、情報を可視化していく役割だったりします。多様なスキルが求められるというか、多様なスキルがあるほど円滑に状況が進んで行くという体験はしています。ただ、もちろん全部僕がやるわけではなくて、多様なメンバーたちがそれぞれに発揮してくれるから、チームとしてすごくいい環境が育っているのではないかと思います。

<FAJ> F A Jで災害復興支援室を立ち上げた時に、我々の中でも「ファシリテーターでござい！」と言って入るのは、たぶんあり得ないだろうという議論をしました。そうではなく、災害の復興支援に行くのであり、その場で困っていることに対し自分たちでできることをやるのだと。ボランティアセンターの運営に資するマネジメントとか、コーディネートとか、いろんな使えるスキルがあって、その中の1つにファシリテーションがあることで、マネジメントやコーディネートがスムーズにできるのだという感覚です。

<篠原> まさしくそうです。自分の肩書きや仕事や、今までの経験を前面に出して支援をしていくのではなくて、それを引き出しの一つとして、篠原辰二という自分自身でぶつかっていくわけです。被災地に行けば僕も土嚢袋と一緒に運んだりとか、土砂かきをしたりしますし。僕は高校が建築科で、木造住居の構造は大体わかっているので、「床板はこうやって剥がすんだよ。」とか、ノウハウをボランティアさんたちに伝えたり、そんなことも引き出しのひとつですよ。みんなそういう引き出しは必ず持っているのだけれど、始めから、その引き出しを開けて「こ

ういう私です！」みたいな形で入っていくと、ちょっとおかしいですね。

＜FAJ＞ 私たちも最初のころは、鍼灸のプロの会員が行って、被災者の方のマッサージをしながら、実は“ちょっとファシリテート”しているけど、みんなマッサージに来てくれたと思っている。というようなことがありました。

＜篠原＞ その後のことを考えていくと、そうやって人としてちゃんと接して、信頼関係が生まれた中で、「そういえば、復興に向けてこんなことをやろうと思っているんだけど、篠原さんファシリテーターのNPOやってたよね？」って声が上がってくると、そこでやっとならファシリテーター・フェローズの篠原として関わらせてもらうことができると思うのです。2年間で僕らはずっと人としての関わり方を、役割や立場がある中で、ですけれども、作って来たんじゃないかなと思っています。

意思の表出として「断ること」の大切さ

＜FAJ＞ 私も東北に入った時に実感したんですが、被災に関係なく、市民の人たちが、ファシリテーションスキルと言わないまでも、価値観が違う人とか、外から来た人と、あまりケンカをせずに話し合える場やスキルが、まさに、防災のために水や食料と同じように必要だと思っています。喧嘩になったり、困ったりしてから、呼ばれていくこともあったので（笑）。今回被災者の方たちといろんなところで話し合いをされて、社協でも同じように感じられることはありますか。

＜篠原＞ やっぱありますよ。社協の内部でも、上司と部下の間で意思疎通が図れていないとか、がんばって不眠不休で働いている職員さんたちが、経営者に対して、「私たちのことを、どう思っているのだろう？」みたいなこととかね。支援者間のいざこざもそうですが、被災地の市民の方々が、人との向き合い方とか、丁寧な付き合い方とか、そうは言っても、自分の価値と相手の価値との違いを明確にして、必

要であれば断りの意思を表出することを、少しでも理解して、コミュニケーションのトレーニングをされているのであれば、またちょっと違うんじゃないかなと思います。

同じように支援にあたる人たちやボランティアさんたちも、そういう視点を持っているといいと思います。僕らがボランティアさんたちによく言うのが、がれきの撤去をしに来たわけじゃなく、サロン活動の支援に来たわけじゃなく、学習支援をしに来たわけではなく、それらの活動の先に被災した方々の生活の再建や復興があるのであれば、そこを目指して来たんでしょ？ 手段と目的をちゃんと分けて考えよう。みなさんがお仕事を休んで来ている期間で、すべてを完結しようとか、自分たちが来ている間に少しでも頑張ろうと無理をされないでください。被災された方々にも皆さんにも、それぞれ時間軸があるから、そこでぶつかってしまっただけはもったいない。そういうお話はよくさせていただいています。お互いが、人との接し方だったり、基本的な人間関係のトレーニングというか、考え方をもっと多様に持っているのが望ましいんじゃないかなと思いますね。

FAJ災害復興支援室で大切にしたこと

＜FAJ＞ 私たちは、震災後最初の一年間はまったく会員に対して支援の公募をしなかったのです。ファシリテーションがわかっている人か、あえてしない人を、指名で支援に行ってもらいました。そうでないと、みんな学びの場だ、いい経験だとして駆けつけたら向こうも大迷惑だろうということで。

一年後公募をするときに、選考をどうするかという議論もありました。復興支援室のメンバー二人が岩手に向かう車の中で、「もし選べといわれたら何を基準にする？」って言われて、ファシリテートしない人っていう声と、飲み会で仲良くなる人っていう声と。

＜篠原＞ それ、すごく大事だと思いますよ。飲み会の席だけ元気になる人がいてもいいんです。飲み会の

中で関係性の構築がすごく上手な人っていますよね、ほんと才能あると思います。

<FAJ> 逆にね、FAJ 会員がボランティアで行って、張り切ってワークショップを手伝ってくれるんですけども、その後の懇親会になると壁でメールやっていたりしてね、「ちょっとちょっと、ここが一番大事な場でしょ。」って(笑)。

<篠原> 現場に行って、この人何しているのかなー？と思われていても、飲み会のときとか、みんなで後から振り返りをしているときに、こうだったああだったと話ができる人のほうが、本当に必要だと思います。ファシリテーション協会さんも、関係性の構築といったところはすごく丁寧にされていますね。

ファシリテーションの工夫いろいろ ～キットや道具たち～

<FAJ> 最初に東北に行くときに、まずはヒアリングのはずが、話し合いの道具が足りないということで、レスキューパックというものを作り、持っていきました。

A4 の紙とマジックと付せんなんかをパックにして、それから神戸のメンバーが、2 晩くらいで避難所での付せんの使い方をリーフレットにしてくれたので、それも入れて。東北の会員が NPO に声を掛けて、希望の団体をまとめておいてくれたので、レスキューパックを届けながらヒアリングしました。プロッキーは会員が全国から送ってくれたのですよ。

<篠原> 僕らも、「ファシリテーターの工具箱」ってこのを作っています。僕が、あちこちで仕事をするとき、依頼を受けた現場に行ってもマジックがない、というところもあるのです。だからプラスチックの工具箱に全部一式入れて、自分でいつも持ち歩くようにしています。これを岩手県内にもお納めしました。

自由に時間設定できるストップウォッチが入っていて便利です。これが 1 万円もするんです(笑)。

<FAJ> 1 万 9 千 5 百円で販売しているんですね。は

さみから全部入ってる。ストップウォッチは、こういうのがあったらいいねってよく話しています。

考え方・生き方の根っことしてのファシリテーション

<FAJ> 篠原さんは、参加型の場作りであるとか、支援する・支援されるの関係ではなく、皆さんが同じ、という考え方をされてきたわけですが、そういう考えの最初の根っことはどこからですか？

<篠原> そうですね…。実は僕、高校の建築科の授業で一番好きだったのが測量の時間でして、ここが基点と一箇所決めて、ここからここまでが何メートルあって、高低差がどのくらいで、というのを全部測っていくのが、ものすごく好きだったんです。デザインをするという完成物とかプロセスばかりじゃなくて、最初の基点を作っていくとか、さっきも話をした、要因分析をするとか背景を探る、というようなことは、基礎や基点を探っていくとわからないわけですよ。そういうのを探っていくのが大好きです。だから、現場に行っても、その場を作るよりもっと手前の段階で、この人たちとこうやったら楽しいだろうな、こういう風にできるのじゃないかな、みたいなことを考えるのが好きなんです。

大学に入ったときに、最初の講義で日本の福祉の歴史みたいなのを先生が話すんですけど、どう見ても 4 0 代半ばの先生が、戦後の日本はこうでああだと話をしている、この人その時いいよな、体験



していないことをさも知っているように話をして、この人は何者だと思った。で、先生その頃生きてないよねって聞きにいったんです。そしたら、お前失礼なやつだ、と。(笑)で、先生が話していることをまともに受け取るこちらもよくない。大学って自分で学ばないとだめな場なんだなというのを、その先生から教わったんです。

1年生の7月ぐらいで大学にあまり通わなくなってバイトばかりしていました。大学があった町で活動していた市民団体の活動でネパールに NGO 活動に参加して日本が建てた孤児施設の運営のサポートを2ヶ月間ずっとさせてもらったんです。

英語もネパール語もしゃべれなかったので、毎日朝は幼稚園に通って、子供たちと一緒に書き方とか言葉の勉強をしながら2ヶ月間過ごしました。それは「日本の戦後の福祉ってこうだ、ああだ」みたいなことを、体験しにしているわけです。戦後の日本にも、多分こういう貧しさがあつたのではないかなど。そういうところ、現場に身を置くというのが、多分、一番の根っこになっていると思います。

ファシリテーションを学ぶことで失うもの、怖さ

<FAJ> これからファシリテーター・フェローズがもっと大きくなって人が増えていく中では、明確に言えないですが「ファシリテーションを学ぶことにおける弊害」とか、「ファシリテーションを学ぶことで失うもの」があると思っていて、そこら辺の「怖さ」を、会員や後輩に伝えていく時にどうしたらいいか、何かお考えはありますか？

<篠原> ファシリテーター・フェローズも、北海道内で興味関心を持っていただいている方々が、たくさんいらっしゃるんですけど、その人達が求めていることの中に、「これってファシリテーターとして認定してくれるのですか？」とか、会員さんの中にも「私、研修に何回も参加していますけれども、いつになったら役割をくれるのですか？」という方もいらっしゃる。お墨付きを与えたところで、その人が

どうやって使うのかは知らないですし、そもそもお墨付きを与えることができるのかっていったら、誰もできないですよね。例えば、あるグループの中では有効に機能していたとしても、別のグループにいった時にそれを有効に活用できないという場もあるでしょう。

僕らは特に自然環境とか、自然体験系の人たちとはなかなか結びつきがないので、それを求められても僕らとしても対応できない、とらえられないとか、わからないこともたくさんなわけで、その中で認証・認定したところで何も始まらない。

でも、最近多くの人たちが、これは僕らの法人だけではないかもしれないけれども、会員であることのメリットを、ものすごく求めてきています。認証や認定はできないということを伝えると、会員さんが「じゃ、会員になっているメリットがない」といなくなったり、ということもあります。そんな風に資格を取る感覚でファシリテーションを学ぶとか、ファシリテーター・フェローズに入るといことは、やっぱり怖さがありますね。

<FAJ> 私、自分の団体と重ねちゃうんですけど、例えば、最初は認定がほしくて入ってくる。がっかりする。でもその時に何か活動があり、なんとなくスキルアップできるじゃないかと思って、自分だけにベクトルを置きながら活動するけれど、市民とか高齢者の方とか障害のある人たちと関わる中で、ちょっと違うぞとだんだん目覚めていくプロセスが私は好きなんですよ。働きかけをする現場があって、現場を通して参加した人たちがまた気づいていく。そうやって認定とは違う価値を見出してくれるとうれしいですね。

これからの活動

<篠原> ファシリテーター・フェローズも4年目に向けて、法人の体制のあり方とか、経営的な部分だとかを、総会の場でも理事会の場でもみんなで喧々諤々、壊れるんじゃないかっていうくらい言い合い

をしています。ファシリテーター・フェローズを作る前の勉強会の時から、形作られてきたなと思ったら、ガーッと崩してもう一回ビルドアップしたり、結構いろんなものを壊しながらやっていますけれど、今ちょうどみんなが見ている方向が同じなので、そこに向かって一人一人がどうあるべきかということ、各人の中で感じてもらえる場を作ったりしています。

<FAJ> まさにファシリテーションの大切さをわかっている人同士で議論する場ですね。

<篠原> 自分達が組織を作って、みんなにそういう場を提供して、「共創」という社会を目指そうとしている時に、ファシリテーター・フェローズ自体もちゃんと共創社会の一つとして、一緒にみんなで作っていきましょう。誰かに何かを任せて成り立っているのではなくて、一人一人が参画をする意識をどうやって高めていけばいいのかを、理事6人と監事が2人いるので、8人でわいわい話し合っているところです。

もうひとつ、会員さんたちが研修を受けた後、それをもち帰って地域実践に結び付けているんだけど、その活動のフォローアップを今までしてこられなかったのが、現在は、実践研究誌「Fellows」という冊子の第二号に向けて、“あなたの地域での実践を書いてみませんか？”、という呼びかけをしているところです。ファシリテーター実践をまとめていくことで、研修での学びが活かされているとか、ファシリテーター・フェローズと関わったことによる自分の中での成果とか気づきだとか、そういったものが少しずつ整理されるのではないかと思います。入会される方に対しては、養成講座での学びはこういうものしか用意できないけれども、それをこうやって地域実践に結び付けているんだよ、あなたも研修会の場づくりに一緒に参画しませんかと。そうやって多様な場づくりをしていけばいいのかなと思っています。1年に一冊ずつしか発行できないものですが、続けて発行することで、皆さんにもっと理解していただけるツールができるのではないかと考えています。



<FAJ> 最後になりますが、「篠原さんのファシリテーションってなんですか？」と聞かれたら、どのようにお答えになりますか？

ファシリテーションと人、そして私たち

<篠原> そもそも、自分自身が何であり、どこでどう仕事をしていたとしても、自分自身が社会に存在するために必要なもののひとつだと、思うのです。自分がそこに存在するという事は、人に何か影響を与えていたり、とか、何か価値としてあるわけですよ。その価値の表出ってどうできるのかというと、自分が発信しているものだったり、起こしている行動だったりだと思うので、多分、つきつめると、自分そのものになってくるんじゃないでしょうか。これは願望ですけども、自分は、ファシリテーターという、どんな場面でも、いろんな意味で、援助・促進をしていく役割をもった人間なんだ。できるかどうかは別としてそういう役割を持っている一人の人間なんだということです。「人がそこに在るのであれば、ファシリテーションもある」というイメージです。

最近、ファシリテーター、ファシリテーションって声高らかにいっている人達って、自分の何かを作っている人達がものすごく多くて、「あそこは違うから」って。なんでそう、かたくなに違いを強調するのか...

<FAJ> ファシリテーターをやっているのにすごい

矛盾を感じます。FAJは今までファシリテーションをやっている他の組織と繋がることってあまりしてこなかったのですが、今年（2013年）はIAFというファシリテーションの国際団体と連携しようとしていて、きっとすごい相乗効果があるだろうと、篠原さんのお話から感じました。積極的にいろんな団体とつながってみることが大切で、多分、考え方としてはちょっと違うところがあるはずなのです。違ったところは何かを見つつも、お互いやりとりできることがすごくいいなと思います。

<篠原> 違いを認めながら、伸びていけばいいんですよ。

<FAJ> 篠原さんのめざす「ファシリテーターという言葉、団体ってわざとらしかったよね」っていわれる時代を作りたいというところが、まさにFAJが目指しているところといっしょだなと思います。そういう目的に向かって、これをご縁につながっていただけらと思いました。今日はありがとうございました。

野崎 隆一 さん

NPO法人神戸まちづくり研究所理事・事務局長

建築家として大手不動産会社で勤務後、独立。その後阪神淡路大震災では市民派の専門家として復興のまちづくりの支援を行ってきた。東日本大震災後は主に岩手県・宮城県での被災地の支援を行っている。

浅見 雅之 さん

合同会社人・まち・住まい研究所代表社員

建築会社で勤務後独立。古民家再生、まちづくり、景観の専門家として多くの自治体のアドバイザーを務める。現在は、野崎さんらとチームを組みながら岩手県・宮城県の被災地の支援を実践中。



自己紹介 ～私の仕事と阪神淡路大震災～

<FAJ> こんにちは。まずはお二人の普段のお仕事や今回の東日本大震災後の支援活動について、また、阪神淡路大震災の時の活動をお聞かせください。

<野崎> 私は阪神淡路大震災までは、普通のサラリーマンでした。阪神淡路大震災で退社してボランティアを始め、マンションの再建を中心とした住宅の復興、市場の再建や壊れた戸建て住宅を共同して再建するようなプロジェクトをやってきました。5棟のマンションのうち二つが裁判になって合意形成の難しさ、最初のボタンの掛け違いがなかなか修正できないってことを実感しましたね。

<浅見> 僕は建築設計事務所に就職して、一年たたないうちに阪神淡路大震災に会いました。震災のあと、先輩に連れられて、地域の復興のお手伝いに関わりました。そのころは、まだ駆け出しで

本当に右も左もわからなかった。今、兵庫県からは、阪神淡路大震災の時の経験を東北に持って行って活かせという命題を与えられていますが、実は正直なところ、阪神淡路の時の経験なんか一つも残っていないなあと感じています。

まちづくり支援の仕事をはじめたのは、10年ちょっと前、行政の方に八鹿（兵庫県養父郡八鹿町・現養父市）で街並み保存をしたい人たちの手伝いに行かないかと言われたのがきっかけです。地域のみなさんとゼロから手探りで話をしていきます。そこでは「この街並みが素敵だから残したい」という人たちがいる一方で「いや、そんな古臭いものいらん」って思っている人たちもいる。こうした様々な思いを一つにまとめるために「街並みだけが大事なのか、町にとって大事なものは何なのか、それを一緒に見つけよう」と。そして「街並みが本当に大事なものと分かったら皆で守れば

いいんじゃないですか？」というスタンスで話を進めました。全くもって on the job という感じで、いきなり地域の人たちの前に立たされ、みなさんの気が萎えないよう、飽きないよう、しかも、どうやったらみんなの目標を決めて、何か一つでも始められるか・・・と実践してきたことが今の自分のベースになっています。

3年前に独立して設計事務所を立ち上げましたが、お仕事としては、建築設計2割、まちづくりのお手伝い8割という感じです。

住民主体の復興プロセスをどうファシリテーションしているか

<野崎> 僕が初めて被災地に入ったのは震災から1週間後の東松島市です。兵庫県から電話がかかってきて先遣隊で同じバスに乗って行ってください」と依頼がありました。現場は、一回見たら、頭から離れないというくらいの大変な姿でしたね・・・それから、4月の末に弁護士だとかいろんな専門家グループで、岩手から福島、宮城と専門家相談の場をつくって、避難所をまわって相談会をやったりもしました。やはり継続的に入らないと、と思ったのは、6月か7月くらいかな。昔の会社で同期の友人が気仙沼で被災していて、彼の奥さんとお母さんが亡くなっていたんですね。彼を見舞に行った時に、しょんぼりして酒ばかり飲んでるから、うっかり「復興のこと一緒にやろうよ」といったのがきっかけです。その後一週間後くらいに電話がかかってきて、「野崎、確かにそうや。おれも、やるわ」といつてくれたのね。それで気仙沼に行かないといけなくなってしまったんです（笑）。

<FAJ> 継続的に被災地に通われていますが、どんな仕組みを利用しているのですか？

<野崎> 当初は、どこまで継続的にできるかはわからないけど対象を固定して深く入りたと思いました。ちょうど兵庫県が、まちづくりの専門家を現地派遣する仕組みを作っているところで、その制度設計をお手伝いしたりしてね。今はその専門家派遣の制度で被災地に通うことができています。1チーム、アドバイザー二人と記録者で三名です。はじめは、誰と組もうかとだいぶ考えました。（笑）なぜ浅見くんにしたかという、一つはね、僕自身がわりといい加減な性格というか、あんまり、がちと決めてやりたくないタイプ（笑）。そんな僕のいい加減さと波長があって、適度にうまくやって・補ってくれるのは誰かと考えたところ浅見くんでした。彼に声をかけたら「じゃあ行きましょう」という話になって。結果的には大ヒットなチームだと思っています。

<浅見> 僕は、震災直後はテレビを見るのも無理でした。あまりの被害の凄まじさに、2週間ぐらい、ほんとに何もできないほどでした。ましてや、現地に行くなんて全く無理だと思いました。野崎さんや様々な人達が、災害直後から支援に行っているという話は聞いていました。でも、僕は、また事務所独立したばかりで、手元の仕事はこなさなきゃいけないし、収入は得なきゃいけないし。そんな手弁当で、交通費まで自分で出してなんて無理だなんて思っていました。大して能力もないのにお手伝いに行って、結局誰の役にも立たないなんてことになるのは嫌だという思いもあったような気がします。

震災から半年くらいして、色々なことが落ち着いてきたとき、野崎さんからよいタイミングで声

がかりました。しかも、兵庫県がつくった派遣制度で行かせてもらえるという。それなら何とかなりそうだということで、野崎さんに同行させていただくことにしました。

でも、動きはじめてみたら、やっぱり手探りだったんですよ。

<野崎> 仮設住宅を訪問する時、どう進めようかって二人でものすごく悩んだよね。東北の人は口が重いと聞いているから、じゃあ、どうしようかと。支援当初は、阪神淡路大震災での話を少しして、復興ってというのはこんなプロセスで進んでいくのですよと。みなさん、不安でしょうけれども、次にはこう変わっていきますとか、そんな話を簡単にしました。そのあと、被災者の皆さんが不安に思っていること困っていること、何でもいいから話してくださいと、全員に順番に端から。そして話してくれたのです。

<浅見> 最初はどれだけ震災で大変な目にあったか、みたいな話からね。

<野崎> 辞退されるかと思ったけど、けっこう話してくれました。それを浅見くんが模造紙やホワイトボードにずっと書いてくれて。僕が一通り話した後、浅見さんに振り返りをしてもらったりしています。



<FAJ> 支援の流れをうかがいたいのですが、1回被災地に行くと何日間滞在されるのですか？

<野崎> 1カ月に3~4日は被災地に行きますね。今回は、金曜日から入って、彼が日曜から入って3泊4日。6地区の集会所で支援や懇談会をしました。

様々な支援スタイル

~困った支援、喜ばれる支援とは~

<FAJ> 被災された住民の皆さんの反応はどうですか？

<野崎> 「こんなに私たちの話を聞いてくれたのは初めてだ」っていう言葉を仮設の自治会長さんが言ってくれたりしました。あれはすごくうれしかったですね。

<浅見> 「あ、聞いているだけでいいんだ」って…あの時思いました。

<野崎> まずは話してもらうことが大事だと実感しました。

<FAJ> それまで来ていた専門家はどんな支援をしていたのでしょうか？

<野崎> いや、「やっぱりこの地域はこういう地域で、こういうことが大事ですよー」とか、「こういうふうにしたら復興早くいきますよ」とかね。提案やアドバイス、自分が分析したことを聞いてほしいという人もいます。仮設住宅の人は毎回いろんな先生がきて、提案やアドバイスの話を聞かされるから疲れるようです。

ある自治会長さんは、「おれたちの話も聞かないで、なんであれだけしゃべれるんだ？」ともおっしゃってましたね。

<FAJ> 地域の人のお話を聞くより、提案とアドバイ

スの方もおられるのですね。では、野崎さん、浅見さんのことを住民の皆さんはどうとらえていたのでしょうか？

<野崎> 最初に飛び込みで伺った時は、「よく来てくれた。君たちみたいな人を待っていた」って言うてくれたんですけど、後から聞くと、実は「うさんくさい」と思っていたと(笑)。「神戸から??」という感じだったようです(笑)。

<浅見> こういう本音を言うてくれるようになったのは、実は最近のことだったりします。

<FAJ> そこから支援をしていくときにどんなステップがありましたか。

<野崎> 東北と神戸で場所が離れていること、ひと月間隔になってしまうことで難しく感じる場合があります。日常的には神戸で別の仕事をしているから、頭の中では被災地に出向くまでは、それまでのことが飛んでいるんですよ。

<FAJ> 前回、どこまで何を支援したかとか覚えておくのですよね？

<野崎> 行く一週間前になったら、前の時にどんな話したっけとか、振り返っていますが、打ち合わせもあまり出来ないで行っています。

<浅見> 僕が、次に行く際に一番最初にやるのは、前回の模造紙やホワイトボードの画像を見ることです。

<野崎> これらが残っていることが大事ですね。記録や写真があると雰囲気も残っているし、あのときはこれが宿題だったなとか、次はこれをやらなきゃいかなとか、なんとなくわかってきます。

<FAJ> 模造紙やホワイトボードは視覚的にも残りますよね。前回の瞬間を思い出すという効果もあるんですかね。

<浅見> 紙の議事録になっちゃうと、読んでも頭に入ってこないんですけどね(笑)。今回の派遣では、兵庫県に報告するために紙の議事録を作っていますが、普段はわざわざ模造紙からテキストに変換する作業はしません。グラフィックでの記録が残ることが一番大事だと思っています。

<野崎> 被災地の集会所に二ヶ月後に行っても、まだホワイトボードに書いたのが残っていることもあります。「普段、ホワイトボード使うでしょ？」と言ったら、「もったいなくて消せない」と(笑)。

<FAJ> じゃあ、その間いろんな人が見てるんですね。

<野崎> 来る人、来る人、模造紙・ホワイトボードの記録を置いておくと見てくれます。

<FAJ> 記録が一ヶ月間集会所に残っていることの効果って何ですか。

<野崎> 参加できなかった人がそれを見ることで、こんな話だったんだなということがわかる。これは情報共有の点で大きいですね。

<FAJ> 他の件ではあまりホワイトボードなどを使わないから残るのでしょうかね。住民のみなさんが記録の良さに気付いて、自分たちも実践するようになるといいですね。

途中でふりかえりを入れる効果

<野崎> 今、“会議の途中で振り返って、また前に進める”っていうやり方をしていますが、この最初は、僕が息切れするから、ちょっと浅見さんにしゃべらせて、その間にどうするか考えようかなぐらいの話だったんですよ。

<浅見> たしかに最初はそうだった(笑)

<FAJ> 野崎さんの休憩時間でもあったんですね

(笑)。

<浅見> 「ここで野崎さんは、休憩かーって思いましたよ(笑)」突然野崎さんに「まとめろ」って言われて「まとまる話ちゃうわー！」って思いながらやっています。

<FAJ> まとめるといふか「前半はこんな話が出ていました」って確認するってことですか？

<浅見> そうですね。

<野崎> その辺が二人でやっている面白さですね。一人で単独でゴーって押して進めるんじゃなくて、二人の関係ややりとりで物事が動いていくみたいなね。

<FAJ> 浅見さんから見たらどうですか。一人じゃなくて二人で支援する良さって。

<浅見> やっぱり野崎さんとやり始めてからかな、二人の方が絶対にいいと思っています。

<FAJ> どうしてですか？

<浅見> まず、模造紙・ホワイトボード係は、みなさんの相手しながらは絶対に書けないんです。野崎さんが進めていて、僕が書いている、書いているからこそ見えてくることもあって、これが大事だと思います。

<FAJ> 何が見えてくるんですか。

<野崎> たぶんね、聞いて書いている方が状況をつかんでいると思うんだよね〜。

<FAJ> 全体の、その場の状況を？

<野崎> 僕は進行の方が気になっているからね。時々「野崎さん、聞いてないでしょ」って浅見さんに言われるんだけど、住民さんの意見を「うん、うん」って言いながら、実は聞き流していたりすることもあるわけ。彼はそこを見抜いているんですよね。(笑)

<FAJ> 見抜かれているんですね(笑)。あとか

ら、そこをすり合わせるもあるんですか。

<浅見> いや〜、すり合わせるというか、野崎さんは「まとめて！」って後ろを向けばいいだけなので(笑)。

<FAJ> じゃあ、野崎さんが引き出し役で、浅見さんが整理役で、住民さんは頭を整理されてすっきりして、情報も得て帰るという感じですか。

<浅見> 単純に図式化するとそういうことかなあ。

被災された住民の皆さんとの関係づくり

<FAJ> 支援で現地に入る時は、相手もこの人の話が聞きたいんだとか、この人に応援してもらいたいという気持ちがないと支援もかみあわないと私は感じるんですが、その工夫はどうされていますか？

<野崎> 現地への入り方としては、できるだけ偉そうにしないことですかね。「同じ現場で活動していますよ」とか「今日はいい天気ですねー」とか言いながら、被災地の皆さんの中に入って行くとかね。その辺は割とうまくいきましたね。また、話し合いの途中で振り返りやる際に、ほっとする時間、笑いの時間を入れるようにしてますね。

<FAJ> 中間の振り返りの時に小ネタを仕込むん



ですか？

<浅見> わざと「わけ分からへんわー」って書いておいて、「分からへんわーって言ってたね」とか。

<野崎> 違うところあったら「ちゃうちゃう」って言ってくださいと住民さんに言うとかかね。行政の職員さんがそのやりとりに乗ってきたことがあったりしましたよ。

<FAJ> 被災された住民の皆さんとの話し合いの場面で、参加者は住民、役所、支援者のお二人っていう場合がありますよね。全然地元じゃない二人がいるわけじゃないですか。何か、やりとりは違うんですかね。

<野崎> その話し合いの場が険悪になって、住民と行政のどっちも気を悪くするような終わり方にならないようには気をつけます。僕らがちょっと口出すことで改善することもありますから。

<FAJ> 外部の人として？

<野崎> そうです。市議員さんが、役所の代わりに来て、制度の説明をするんだけど、みんなもう不満たらたらなこともあるんです。

<浅見> 言いたいことは言わせてあげたい。でも、議員さんを吊し上げて意味がない。そこは、横からコメントしながら方向性を是正したり、交通整理をするようにします。すると、今後は議員さんが僕らを買ってくれて、結局地域を応援してくれることに繋がったり・・・

<FAJ> その場も、サポートの仕方がその議員さんにも信頼を得るようなきっかけになったっていうことですかねえ。

<野崎> そうですね。もう、役所の代わりに議員さんを責めたてるみたいな雰囲気になってきて。「阪神淡路のときは、市議員さんなんか、現場に誰も来ませんでしたよ。この人、市役所のかわ

りに来てエライ。こういう人は大事にしないと」とみんなに言ったら、もう市議員さんもまんざらじゃない(笑)。

<FAJ> みんな精いっぱいやっていますからね。お互いがけなしあってもね・・・。

<浅見> 議員さんに「こうだからダメとかあだからダメ、もっとこうして」いうのもいいけど、「がんばれ！って言うてみては？」と住民のかたに言ったりします。地域の皆に「がんばれ！」って言われて、悪い気がする人はいないし、絶対がんばろうって思うでしょう？

<FAJ> 住民の方はなんて言うてましたか？

<浅見> 「甘い」って・・・。ただ、僕らみたいな中和剤的存在があると「まあ、言っちゃっても大丈夫かな」というような空気ができることがあって、それは悪くないなあと思っています。

<FAJ> 場合によっては、役所の側からみた復興っていうことを重視して復興にあたるっていうケースもなくはないですよ。

役所の特性を知る・翻訳をする

<野崎> 役所っていうのは、予算が付かないと「できません」ということは絶対言えないわけだから、そういうことを「役所っていうのはこういうところなんだ」と説明する。「だから今、『言えない』って言うてるけれども、実は裏でいろいろとプランつくっているんですよ」とか言ってあげる。

<浅見> 昨日は市役所さんが「ああ言ったけど、内部ではこんな検討していて、こんなにがんばっているんですよ。今は、みなさんに言えないんですけど・・・」って言うて帰ったので、じゃあ「～らしいよ」って言うておこうって。「～らしいよ」

って僕が言う分には誰にも怒られないから、皆さんにお伝えしときますねって。

<野崎> その辺がね、僕らの立ち位置みたいのが役所から見た場合に、阪神淡路の時と、今回は違うんですよ。阪神淡路のときは、住民が作るけども、役所に専門家が登録して役所が専門家を派遣しているから、役所の担当者がいろんな情報をリークしてくれる。

<FAJ> ある意味、役所の被災の現場にお仕事として行っていたんですね。

<野崎> 「議会、議決で予算取れてないけども、来年はこういうことを考えているんだ」とかね、「こういうことを本当はやりたいから、今予算を国に要求している」とか、そういう話をどんどん僕らにしてくれるわけ。そしたら、それを踏まえて、「今はそうだけでも、なんか来年度くらいには道がひらけそうですよ」とかそういうことが言えるのですよね。それで安心するところがたくさんあるのだけど、今回は、僕らガイジン、外から来て、役所も、こんな人らにどれだけリークしていか分からないから、住民と同じ扱いになっている。情報的にはね。それがだんだん、気仙沼の場合は関係がよくなってきて、先月、意見交換会をやりながら、少しざっくばらんに話ができた。今日も、市役所行って、役所の内部資料を、本当は外部には出せないんだけど、「取扱いに気を付けてください」と言ってくれたりした。そういうことは僕らにとってはすごく欲しい材料なんですよ。

<浅見> 僕らだって、役所に悪いようにはしないもんね。

<野崎> 絶対そうだよな。

<浅見> みんな課題を解決しようと思ってやって

いることだから、その足をすくうようなことしないよね。ただ、今回、兵庫県が派遣しているといってもやっぱりよそののだというのはあります。

<FAJ> ただ、そこが徐々に埋まってきている部分もあるんですよね。

<浅見> あれは…。そう。「Q&A」を作ったんです。

<野崎> 我々が作成した「住宅再建Q&A」は大きかったよね。住民が聞きたいことはこうなんだっていうことを、役所の説明資料読みながら、「資料で読むとこういう答えになるね」っていうのを僕らなりに書き改めました。

<FAJ> 住民の人が聞きたいことを役所の資料を見ながら、それを分かりやすく回答を書いていつて翻訳したみたいなことでしょうか。

<浅見> そうとも言えますね。仮設住宅を回っていると、いろんな質問が出てくるんだけど、時期によってですけど、同じ質問があちこちから出てくる。そういう出てきた質問に全部答えを作ってみようって、野崎さんががんばって回答を作って、市役所に送るわけ。

<野崎> うん、そうそう、「添削してくれ」と。「僕らなりに、回答を考えてみたけども、違っているかもしれないから、役所でみてください」って。

<浅見> それをゼロから書いてねっていったら、いつになっても出てこないから、もう書いちゃったよって、作戦ですよな。

<野崎> 直すのは、楽でしょ。

<FAJ> じゃあ、ちょっとは直ってきたわけですか？

<野崎> 直って来ましたよ。かなり慎重に考えられて。(笑)

<浅見> 違ってたらコトだから。こんなこと書か

れちゃ困るという。

＜FAJ＞それを配って住民の方の理解を促進したんですね。

＜野崎＞そのときに、市役所の方から「本来、行政がやんなきゃいけないことをやっていただいたので、厚かましいお願いなんですけど、神戸まちづくり研究所だけじゃなくて、連名にしてくれませんか、いや、協力でもいいです」って言われて、「連名にしますよ」と言ったら、「そうしてくれたら助かります」と。それでぐっと距離が縮まりました。

＜浅見＞あの前後でしたよね、市役所を訪問してコーヒーが出たのは(笑)。

＜野崎＞コーヒー！そうそう、初めて。都市計画の参事官さんかな、コーヒー出してくれて。今までお茶も出なかったのに。

＜FAJ＞その「Q&A」がある意味、市役所のふとこに飛び込むきっかけになったということですね。現地の被災された方々を応援しているお二人としては、市役所とも正面からはぶつかれないわけじゃないですか。

＜野崎＞そう、ぶつかれないですよ。兵庫県からも言われています。「県から派遣しているのだから、絶対にじゃまに思われないようにしてください」って。

＜浅見＞ぶつかれないけど、活動は認めてもらわないとこの先やりにくい。それは住民さんのためにもならない。

＜野崎＞「こういうふうにしたほうがいいんじゃないんですか」ってことは提案というか、言いますけどね。それはまあ、向こうにとってはうるさいことかもしれないけれども。

話し合いの場づくりや空間デザインの工夫

＜FAJ＞話し合いや会合は、車座になったりしながら、浅見さんがホワイトボードに話した内容を聞きながら書いてというような感じですか。

＜野崎＞そうですね、何回かテーブル席で、会議室みたいところでやったこともあるんだけど、あれはうまくいかなかったね。場の雰囲気が固くなって。全然ダメ。

＜FAJ＞畳がいいですか。

＜野崎＞畳がいい。それとか、円形になるとかね。

＜浅見＞そうねえ。パイプ椅子がこうやってならんでいるとちょっと…。

＜野崎＞何回か口の字になってね。前の方に僕らがいる、片面一列に役所の人がいる、その反対面に住民の方が一列に座る・・・そうすると、すごく話しにくい。

＜浅見＞僕、そういうときって、わざと一番反対側や住民の側に椅子を置くことよくあります。

＜FAJ＞遠くに？前じゃなくて？

＜浅見＞「会議は向こうとこっち、全体で行われているんだから、僕がどこにいたって同じでしょ？」って。僕がこっちで大声だしてれば、こちらの住民の人たちも話に乗れるし、発言しやすくなるじゃないですか。

＜FAJ＞浅見さんが発言するときに、あえて後ろや住民の側に行って発言するんですね。

＜浅見＞じゃなくて、自分が席に座っちゃうの。「おばちゃんらの隣がいい」って言って、そこに座っちゃうの。「ねー」って頷きあいながら。そして、おばちゃんにヨシヨシされて・・・。

＜FAJ＞ああ。おばちゃんらのふとこに入混んじゃうんですね。被災地での会場はなかなか選べ

る状況にはないですよ。

＜浅見＞ そう、ない。

＜野崎＞ それとね、集落とか、そういうところの集会は、最初はほとんど全部教室型になってますよね。僕らも1回早めに行って並べ替えようと思ったけど、あの席ができちゃってね・・・。

＜浅見＞ 人によってはいきなり机・椅子の並べ替えを始めちゃう場合もあるけど、僕できないんです。「なんで並べ替えるの？」っていう説明抜きに「並べ替えよう」って言えない。もうちょっとこういうふうにしたから机並べ替えたらいって話ができるようになるまでには、少し時間がかかるんです。ただ最初そこを間違えると、その形式でずっと行っちゃうのでね・・・。

＜FAJ＞ その言いだすポイントは？

＜浅見＞ 最初に、いやこうじゃないんだと、これではうまくいかないからこうしましょうって、言えた方がいいと思うんです。でもなかなか難しい。なかなか言えないんです。

＜FAJ＞ 雰囲気も、ありますか。座って落ち着かれちゃってからだ。

＜浅見＞ その辺、野崎さんもわたしも臨機応変というか、野崎さんの言葉では「いい加減」。

それこそコンサルさんによっては「こうじゃなきゃだめだからこうします」っていう人もいます。

「今こんな状況にあって、こうじゃなきゃだめなんだからやりましょう」って、できる人はできるんだけど・・・。

2人ならではの役割り分担

＜FAJ＞ それで住民さんはどうですか。ついて来られますか？



＜浅見＞ そうやって確信をもって言われたら、しぶしぶ、というか、「何だこいつ」とか思いながらもとりあえずつきあいますよね。それが、なんの効果も生んでなかったら、住民さんは次も抵抗して同じように並べたりするんでしょうけど。

＜FAJ＞ 住民のみなさんの懐にどう入るか、その場をどう工夫するかはセットで考えられているんですね。

＜浅見＞ 野崎さんと僕のセットって、そこもうまくいっているような気がする。野崎さんって、結構おじいちゃんでしょ？ 住民さんは偉い先生だと認識している場合が多い。偉い先生だと僕も思っ、そういう態度でいるし、僕はあえて、はねっかえり役として、勝手なことを言ってます。

例えば、行政さんに、住民さんが言い出しにくいけど、僕も疑問に思うような勝手な質問、ちょっと突っ込んだような質問「ええ？それって、こうなっちゃったら、こんなことになっちゃうんですかあ？」みたいなことを聞くんです。

＜FAJ＞ あえて、住民さんが聞けない質問を。

＜浅見＞ それで、野崎さんが、「いやいやそんな、そんな突っ込んだ話しちゃって・・・」ってたしなめてくれて、行政の味方をするけど、その質問

の中へ入って答えをうまく引き出していく。

野崎さんは住民さんと一緒の目線まで下りてやろうとするけど、僕はさらに一個下まで下りちゃって・・・

＜野崎＞ おうおう。(笑)

＜浅見＞ うちの困った、「はねっかえりぼうず」、くらいまで下りといて。

＜野崎＞ やんちゃ言ってるんですよ。

＜FAJ＞ 賢い役割は、野崎さんに任せるんですね。

＜浅見＞ 私がなんかやらかしても、みんなの前で野崎さんが私を叱ってくれたらいいだけの話だから・・・。そういう関係もあって、まあまあ浅見のいうことは聞こうかって話になったり、頑張ってくれてるな、って思ってもらったりしてます。そんな感じで、本当におばちゃん達と腕組んで「ねー」って言いながらやっています。

＜FAJ＞ じゃあ、そのあたり、少しその「はねっかえり」度を装いながら、質問したり？

＜浅見＞ そうですね。でもこれ、いくつになるまでできるかわかんないでしょ？。今は大丈夫ですよ。だって、被災者の方で多くお目にかかるのは60、70歳代の方たちばかりだから、かわいがってもらいたいな立場でいられるけど。

＜FAJ＞ なるほど。自分の役割をその辺りに見出しながらやっているんですね。

＜野崎＞ 相対的なものだからね。

＜浅見＞ ただ、これも、今振り返ってみれば、そうだったな～っていうことですけど。

＜野崎＞ そうそう、後付けの話でね。そんな最初から計算されてたら・・・。(笑)

芸の域に達した！？

ファシリテーション・グラフィック

＜FAJ＞ 浅見さんがファシリテーション・グラフィックの役や振り返りの確認の役を担当されていますが、特にファシリテーション・グラフィックは見事、芸の域に達しているといわれているとか。

＜浅見＞ 僕は野崎さんとともに一緒に仕事するので、この被災地での活動が初めてなんです。それこそ、あの「ホワイトボード芸」も野崎さんの脇で「ああ書かないとな」って書き始めたものなんです。だから、最初の頃に書いたのは意外と、とっちらかっています。それが今ではだんだん芸になってきました(笑)。

＜FAJ＞ 私も写真を撮って、知人に見せたりしますが皆さん感嘆しますよ！

＜浅見＞ あれは、ホントに今回 On the Job で習得したものです。っていうと、みんな驚くんですけど、実はこんな風に見えるようになったのは、この2年くらいの話です。

＜FAJ＞ 毎回毎回、進化させてる？

＜野崎＞ 1回被災地に行ったら、6回の話し合いや集会で毎回書くわけだから。すごいですよね。私から見ても、すごく疲れてるよね(笑)。6回やると。

＜浅見＞ ホントに疲れるんです。模造紙7枚とかになるときがあつて。みんながよくしゃべると、へとへとになる。

＜FAJ＞ ホワイトボードとか模造紙に書いたりする時、色を結構使い分けて書いていらっしたり、一応時系列で書かれたりしてますが、工夫のポイントは。

＜浅見＞ 時系列で書くのがいいですね。いろいろ試したんだけど、やっぱり時系列で書くしかない。

＜FAJ＞ 時系列になったのはなぜですか？

＜野崎＞ そりゃあ、話した順に書くからじゃない？

＜浅見＞ 最初は真ん中にタイトル書いて、なんかつながりのあるものが、そばにくるようにやってたんですけど・・・。一番の原因はホワイトボードが狭いってことです。壁1枚くらいのホワイトボードがあったら、僕、時系列にはやりません。

＜FAJ＞ 狭い時には、じゃあ時系列の方がいいんですか。

＜浅見＞ そうだと思います。

＜FAJ＞ 基本は、1回の懇談会というか、で、1枚、ホワイトボード1枚ですか。

＜浅見＞ はい、ホワイトボードの裏表で2面使いますね。

＜野崎＞ 模造紙だと何枚くらい書いたかな。結構多くなるよね。

＜浅見＞ 模造紙になるときって、なんか書きちゃうんですよね。

＜FAJ＞ 増やせるから？

＜浅見＞ そうそう。要は、節約しないから。

＜野崎＞ 模造紙はどんどん、2枚目3枚目と移っていつちゃうからね。話も戻りにくいもんね。

＜FAJ＞ その模造紙は、どうしますか？ 現地の人にあげるとか？

＜浅見＞ その地区の住民さん、参加者にあげてきちゃいます。写真を撮ったあとは、荷物になるし。みなさんが作業した付箋みたいなのが発生した時には、うっかりつぶれて読めないということがないように、一回借りるねって持って帰ることも多いんですけど、その後返したり。

＜FAJ＞ そのホワイトボードと模造紙に浅見さんが書いてくれたものへの、住民さんの反応とかど

うですか。

＜野崎＞ 大事にしてくれてますよ。集会室に掲示したままにしてくれることも多いです。隣の部屋との間の扉のところに貼っていると、本当は扉が開けられないじゃない。でも、そのまま貼ったままになってたりして。(笑)

拡大家族会議も支援

＜FAJ＞ お二人は、話し合いの支援のほかに、個人ヒアリングという手段で支援をすることもあるそうですが、個別のヒアリングにはどういう効果があるんですか。

＜野崎＞ 地域の話し合いだと、家庭の事情でみんなの前では言えないこともあるじゃないですか。「みんなで共有して…」とは言っても「実は、ウチの家庭内でこういう問題がある。どうしようか」みたいなことはね。僕らがやったのは、一家族40分くらいしか取れないんだけど、「家族(みんな)で来てください」と。僕らも入って、「一緒に家族会議をしましょう」みたいな感じでね。奥さんとお父さん(だんなさん)だけの家族だったら二人だけでもいいし。娘が同居しているんだったら、娘も来てもらおうと。将来、家を建てるのに、息子のローンを借りるんだったら、「仙台の息子も来てもらって」という感じで。家族同士でも言いにくいことってあるでしょ。家では、じっくり話す機会がなかったりして。

＜FAJ＞ 家族会議がなかなかできていないから、家族の中に野崎さんや浅見さんが入って、家族が話しにくいテーマをあえて、話し合ってもらおうということですね。

＜浅見＞ 全体の話し合いでは言えない部分をね。

＜野崎＞ 「権利関係どうなの？」とか、「死んだお爺ちゃんの名義のままになってるのと違う？」とかね。

＜FAJ＞ 何度も話し合いや会議で会ってるから、住民さんも警戒感がなくなっているのだからできるんでしょうね。信頼関係がある程度できていると。

＜浅見＞ 個別ヒアリングをやると、まず、ご商売がわかるじゃないですか。あとは、ここには賢い息子さんがいるとか(笑)、あとは仙台に娘さんがいるとか、そんな話がびよんと出せるようになる少しづつ進んでいる感があります。

＜野崎＞ 実は、この人とこの人が兄弟だったとかね。そういうことがわかってくるんだよね。

＜浅見＞ 大体、地域の話し合いでご夫婦は並んでは座ってくれないので、どの人がどの人の奥さん、とかを把握するのに時間がかかるんですよ。長いことやっている、わかってくるんですけど。

＜FAJ＞ 集会所の中にバラバラにいた人たちがどんだんかみ合ってくるみたいな、パズルが合ってくるみたいな感じになるんですかね。

＜野崎＞ 距離が縮まることで、集会が終わった後に個別で相談に乗ってほしいという話がポロポロ出てくる。

＜浅見＞ 呼び止められてね。「会社が倒産しそう」

とか相談されたりもしましたね。

＜野崎＞ 聞いても解決できないだけだね・・・。

＜浅見＞ 聞くだけ。「大丈夫、大丈夫、それで命を取られるわけじゃない」「応援する。何もできないけど、応援するから！」って。それだけでもホッとした顔する方もいます。

＜FAJ＞ なかなか、近い、同じ集落の人だと却って話しにくいこともあるでしょうしね。

＜浅見＞ その人も言った。個別のことは、友達とか、娘とか、奥さんとか、親御さんとか、相談しているけど、いっぺんに全部まるまる話したのは浅見さんが初めてだと。その時は一時間くらいかかったんですけど。その時、私は「それは、まず全部奥さんに話したらいいと思うよ」って言いました。「絶対、味方してくれるから」って。

＜FAJ＞ そういうことを通じて、家の中ででも復興が少しずつ進むのかもしれないですね。やっぱり家族が、どう、ちょっとずつ元気になっていけるかって、大きいですもんね。

市民・住民が話し合いの力を高めるために支援者ができること

＜FAJ＞ 復興を語る時、「住民主体」ということばが出てきます。当たり前のように、当たり前になっていない現実もあります。

＜野崎＞ 復興の主人公っていうのは、被災者ですよ。だから被災者につかないと、復興は動かないはずなんです。

＜浅見＞ 「協働」とか「参画」という言葉があるように、復興で参画協働にこだわっているから復興が進まないのか、もっと一生懸命にやらないから進まないのかみたいな話あるけれど、そもそも住民不在の復興計画なんか、あったって意味がな



い。そんなの私はノーサンキュー。それは、地域の気質によらないと思う。どんなに東北の人たちが、行政の言うことをよく聞く、聞き分けのいい人達だったとしても、自分が関わり、自分たちが意志を表明して、それにちょっとでも近づいていくっていう経験を踏めば、地域や復興計画にコミットできるようになると思います。自分の地域にコミットできないような住民さんって不幸ですよ

<FAJ> 自分の生まれた、暮らしたまちだから..

<浅見> 被災された皆さんを前に、復興で回り道してもいいなどとはなかなか言いにくいけれど、回り道だと思っても、ちゃんとみんなで考えて、みんなでやっていかないとしんどいよ、って話しています。

<野崎> それと支援していて思うのは、主人公が主人公であるためには、やっぱりサポーターがいるんだと思います。それは僕らだと思っている。自分たちの考えをまとめて、自分たちはこういう復興がしたいんだと発言するようになるためには、僕らがいろいろ応援してね、情報も提供して進めていく。それで初めて主人公になり得る。関わっていないと地域に残ってそこで住み続けていこうとか、生き続けていこうという決意につながらない。そこがいちばん大事だと思う。

ファシリテーションの道具、使う・使わない？

<浅見> よく使う道具は、模造紙とホワイトボードマーカー。道具として持っていくのはそれだけかな。あと、プロジェクター。

<FAJ> プロジェクターはどのような場面で使うんですか。

<野崎> たとえば、図面を拡大する時とか。

<浅見> フォトモンタージュ、できたらこうなりますというイメージ図みたいな。僕らは基本だと思っていますけど、絵のない議論は通じにくい。

<FAJ> こういったイメージ図を作るのは大変なんじゃないんですか。

<浅見> 夕方話し合いがあるとすると、午前中に簡単に作ったりします。ちょっと絵心が要りますけど.....

<FAJ> 野崎さんの道具は？

<野崎> 僕はあまり道具は使わない。

<浅見> 僕ね、野崎さんの才能だなと思うのは、聞いているか聞いていないかは別にして、すごくうなずいて反応してくれるところです。たとえば、神戸に帰って、勉強会とかシンポジウムとかで僕が壇上に立って話している時に、野崎さんがうなずいているのが見えるだけで、とてもしゃべりやすい！

<野崎> それは僕も感じてるの。前におばさんが座っているとすごいしゃべりやすい。おばさんてみんな「うん、うん」って言ってくれるのよ。

<FAJ> そんなに男女で違いますか？

<野崎> 全然違う。男性がのけぞって腕組みとかしてたら、ものすごくしゃべりにくい。

<浅見> ニコニコしてくれるだけでも話しやすいね。これは野崎さんの才能だと思います。僕は人の話を聞いているとき集中しちゃうことがあるけれど、野崎さんは誰の話でも必ずうなずいて聞いていますよね。

<野崎> 僕はおばさんなんだよ(笑)

<浅見> 本当に聞いているのか、という疑問もくつついてるんだけど.....(笑)

<FAJ> 話す住民さんは気持ちよく話せているわけですね。で、話したことは浅見さんがちゃんと

書いている。役割分担ですね。

復興支援のワークショップ・ファシリテーターのノウハウをどう伝えていくか

<FAJ> 今後、浅見さんと野崎さんの被災地での支援が3か月に1回になっても、「その間は自分たちでやっているよ」ってなってくれたらいいなと思うわけじゃないですか。その辺りの作戦はありますか？

<野崎> その辺は課題だと思いますね。僕も、そういう風に引いていった経験がないんですよ。たとえば、マンション再建なんて出来上がるまでとことん付き合うじゃないですか。毎月会議して、だーっと進めるのが当たり前だと思っているから、ここから先は住民さんに任せてっていう引き方をした経験がないんでね。すごい難しい。

<FAJ> マンション再建だと、ファシリテーター的な要素というより、専門家、コンサルタントの側面が、強いんでしょうね。そういう、支援の資金の特性にも依るのかなあとも思ったりするんですけど。

<野崎> 兵庫県は制度的にも、緊急支援だと考えて、今後、どこかで切ろうとしていますからね。住民さんは最後まで見届けてほしいという願いがあっても、そこにギャップがあります。

<FAJ> 地元の人たちに、自分たちで話し合っ、決められるような力を付けるやり方で提案はありますか？

<浅見> 不可能ではないとされていて。1つは、地元の活動団体に、そのスキルを移転するというか・・・例えば NPO とか、支援団体が継承できるようにできないかという方法。もう1つは、地元のみなさんにできるようになってもらうっていう

方法。いずれにしても、やりたいと思う人はいると思うし、やってできなくはないと思うけど、なにせ時間がない。ある程度馬力があって、若くて頭の柔らかい人が必要です。でも、そういう人って地域活動とか、地域復興のためだけに働いていたら、家族が食えなくなっちゃうという場合が多いので、そればかりやっているワケにはいきません。どこかの大学の若者を雇ってでも地域の事務局運営をやってもらうなんて方法は、余程大きな事業地域じゃないとできませんよね。だから難しい。出口はどこにあるのかなと探っています。

「上手な話し合い入門」だけでも経験してもらって、ちゃんと身に付けてもらったら、普段の自治会会合でも上手く話し合いができるかも、そうしてもらえただけでも進歩な気はします。

<野崎> もう1つの道としては、今は毎月行っているけども、2か月に1回でいいとか、3か月に1回でいいようにできる方法。事務局機能を地域が持つとかね。少なくともメールでやりとりできて、それをみんなに伝えるだけのことができるようになれば、僕らが神戸にいても、ある程度支援ができるわけだからね。

<浅見> それは重要な気がする。

<FAJ> そういう、地元のパートナーになる団体があるといいですよ。

<野崎> あと1つは、中間支援組織にいる若者に議事録の書き方をトレーニングしながら、僕らが行けない会合っていくつもあるじゃないですか。1か月被災地を訪問できないその間、僕らが出ない会合が何回かある。その様子を僕らは知りたいわけね。そこに行って、簡単に議事録を取って、メールで送ってくれれば、「あー、こんな話をしたのか」とかね、次に行く時のつなぎとして、

それが活きるわけです。

<FAJ> 中間支援の組織や、ボランティアセンターの若者がワークショップやファシリテーションの力を自分で身に付けて、その地域に住み続けることは、今後のまちづくりにとっても重要ですよね。支援者が住民の側にたって、その姿を見せる。そのポイントを掴んでまねてもらい自分のモノにしていく。そういう支援も同時にすることの重要性を再確認しました。ありがとうございました。

< 最後に >

今回の専門家インタビューにあたっては、FAJ 会員のボランティアスタッフのみなさんに感謝申し上げます。みなさまのご尽力で公開することができました。インタビュー、撮影、文字おこし、文章化などの行程に知恵と時間を頂戴しありがとうございました。

【編集スタッフ体制（敬称略）】

「金香百合さん」記事担当

遠藤 智栄、小野 浩司、壁谷 雄一、清水 昌代、内藤 嘉郎、成井 明子、中島 美暁

「櫻井 常矢さん」記事担当

徳田 太郎、伊藤 裕美子、加藤 博敏、塩塚 マリ、吉田 尚人

「篠原 辰二さん」記事担当

鈴木 まり子、田頭 篤、山口 博美、横田 孝子、竹田 和矢、井上 有史

「野崎 隆一 さん、浅見 雅之 さん」記事担当

遠藤 智栄、石井 千秋、武内 麻佐子、矢野 花織、小栗 由香

全体編集統括チーム

遠藤 智栄、田頭 篤、西野 靖江、向山 聡

復興支援専門家のインタビュー記録

～災害復興支援とファシリテーションを考え深める～

2014年2月20日発行

発行 / 特定非営利活動法人 日本ファシリテーション協会
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-12-8 ル・グラン原宿
URL : <http://www.faj.or.jp/>
e-mail : fukkou311@faj.or.jp

本書は、出典を明示し、一切の改変をしない状態で、かつ非営利目的での使用であれば、自由に複製・配布できます。 2014 FAJ. Some Rights Reserved.

